那覇市文化財調査報告書　第75集

当間古墓群

（第Ⅰ地区編）

－航空自衛隊那覇基地庁舎建設工事に伴う緊急発掘調査報告－

２００７年３月

那覇市教育委員会

例　　言

1．本報告書は、平成 14 年度末に調査準備を行い、実際の発掘調査を平成 15 年度に実施した「当間古墓群・当間溝江原遺跡緊急発掘調査」の成果を収録したもので、調査報告書「当間古墓群　当間溝江原遺跡」の第Ⅰ地区の補遺として別冊で編んだものである。

2．本調査は、航空自衛隊那覇基地での庁舎建設工事に伴い行われたもので、那覇防衛施設局（現沖縄防衛局）の委託を受けて那覇市教育委員会が実施した。

3．本報告書の執筆は玉城が行い、編集は吉田健太・山下真利子・請盛智秋・真栄城和美・玉城真紀子・牧山美緒らの協力を得て玉城が行った。

4．出土した資料については、すべて那覇市市民文化部文化財課で保管している。

目　次

例言

第４部

第１章　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２章　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

図版

第4部

第Ⅰ地区（補遺）

はじめに

当間古墓群の第Ⅰ地区である、第1・9・10・11・12・14・15 号墓の成果について、概要を別冊の報文（第2部 第Ⅰ地区）で述べたところであるが、ここであらためて触れておく。

遺構

第Ⅰ地区の古墓群は、本遺跡発見のきっかけとなった第1号墓をはじめとする7基の墓からなる。海（西）側に突出した舌状台地の先端部を取り囲むようにその斜面に形成されており、これらの多くは比較的簡素な外観と墓室内の構造を持つフィンチャー、あるいはフィンチと俗称される小規模な横穴式の掘り込み墓である。なお、それぞれの古墓の番号は発見順、もしくは着手順に任意に付した遺構番号である（第1図)。

第1号墓（図版5～7）

本遺跡北西端、丘陵トップの縁に造られている。丘陵上部が削平されとことにより、天井の一部は崩落し墓正面も削られて本来の面を残していない。発見当初より外から墓室内が覗ける状態で、内部に蔵骨器が確認できた。発掘調査の過程で墓口を塞いでいた蓋石の一部や二段に並べられたサンミデーの石列が確認されたが、掘り進めるにしたがいさらに下位の遺構のあることが分かり、最終的に小礫を敷き並べたサンミデーが検出された。墓室内は一様の平坦となっており、タナなど明確な遺構は検出されなかった。

第9号墓（図版8～11）

先の第1号墓の東隣に北面する。発見当初は二個の粟石の切石が直立した状態であった（後に墓口の蓋石と判明)。墓口はこの切石除去後に外部から土砂の流入により埋まった状態で検出された。

幸い土砂は墓口周辺部のみで墓室内にはそれほど流入していなかった。墓口奥行きはあまり無い。

外観や墓庭部には目立った遺構はなかったが、墓室内中央手前にサンゴ塊片と横位に並べられた瓦が検出された。瓦は丸瓦で平行に置かれており、シルヒラシ時における棺の据え台とみられる。漆喰が付着しており実際屋根に葺かれていたものを転用したとみられる。他方、サンゴ塊は上部が窪んでおり香炉として用いられたのかもしれない。

第10号墓（図版12～16）

先述の第9号墓の後方（南側）斜面上部に所在する。墓口前方に方形の切石と、さらにその前面に寝かされた同じく方形の切石が検出された。それぞれ墓口の蓋石とその前面に据えられた香炉石かとも考えたが、下部に後世の堆積土があることから、前面の切石は本来、後方の蓋石上部に積まれていたものが落ちたものと判断した。墓庭には枝サンゴ礫を敷き詰めた面が検出された。

墓室内は比較的原形を保っており且つ、手の込んだ造りである。すなわち中央平場を中心に奥壁側および左右壁手前にはタナが設けられており、蔵骨器（および転用蔵骨器）が安置された状態であった。

ただしこれら蔵骨器の身に伴う蓋が乗っていたのは 1 基のみで、他は蓋をしていない状態であった。左方タナの蔵骨器は割れ散っており、右方タナの転用蔵骨器も大破し器体上部が落ちた状態であった。

第 11 号墓（図版 17～23）

舌状台地先端の南側斜面に形成された、今回の発掘調査対象墓で唯一の破風形式の外観を持つ墓である。琉球石灰岩の切石を組んで墓堂および墓庭を囲む石垣を造る。墓堂正面両脇には袖石積みを持ち、上部には破風屋根の庇を有する。屋根の奥行きはあまり無く、後方地山（細粒砂岩：ニービ）へ取り付く。前面のサンミデーは二段、石積みの目地などに漆喰が残っており、本来全面を漆喰化粧していたとみられる。

墓庭は石垣によって囲まれるが、向かって右側のそれは途中で右に折れ曲がり外へと伸びる。これを平面プランでみると墓堂側から外へとＬ字状を呈する。墓庭の覆土は約 20～30cm ほどで地山に達する。墓庭は地山を削平して平坦部を造り、土を被せて造成したことが分かる。

墓室内は奥壁側に一段のタナを設けてあり、またその手前の平場（シルヒラシドゥクル）ではニービで造った棺の据え台が検出された。

第 12 号墓（図版 24～27）

台地先端の斜面上位に位置する、石組の袖墓を有する墓である。発見当初は袖墓がメインと目されたが、調査を始めて向かって右側の壁面清掃時に墓口が発見されたものである。

袖墓は、琉球石灰岩の切石を組んで造られているが、石組は雑で、仔細にみると他の構造物に使われた石を再利用しているのが判る。

一方本墓は、地山を掘り込んだもので向かって右側に壁面を持つ。

本墓と袖墓とは庭を共有しているが、庭の土層断面に対応するレベルでみると、本墓は一旦地山面を削平し造り出しているのに対し袖墓に対応する面は最上位の枝サンゴ礫を敷き詰めた面となっており、墓の新旧が窺える。

第 14 号墓（図版 28～34）

第 11 号墓と同 12 号墓の間に所在する。墓堂上部は地山の斜部となっており、また墓堂向かって左側に袖石状の出張りを設けるなど、それを意図したものかは不明だが、外観は一見破風墓をイメージさせる。墓庭は、向かって右側は地山の壁となっているが左側にそれは無く、オープンな状態となっている。

墓口前は一見サンミデーのように一段高くなっており、表面には枝サンゴ礫が敷き詰められている。この墓庭を長軸に沿って半裁して掘り下げたところ墓口前方に壺屋焼の土鍋（サークーと呼ばれる）が身と蓋セットになった状態で検出された。この土鍋の中からは古銭と鉄釘さらに鶏の卵と思しき遺物が充填された状態で入っていた。また、袖隅からは瓦質土器 1 個が出土している。

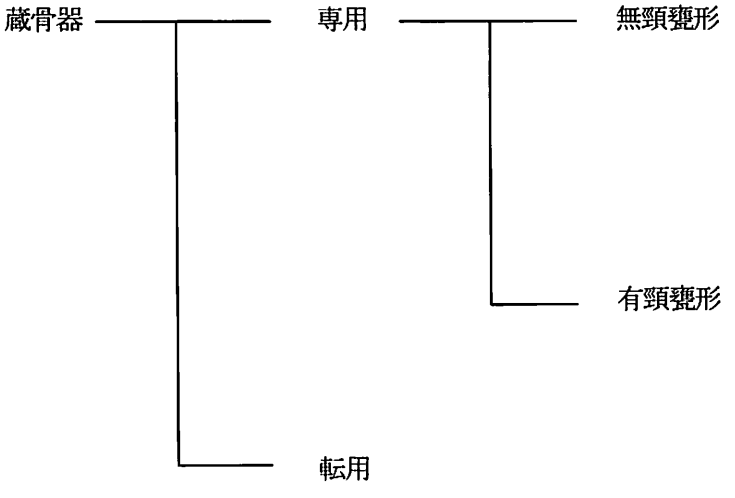
第15号墓（図版35～37）

先述の第 12 号墓の下位の斜面において、発掘調査後半に発見された墓である。斜面途中に墓口部分が顔を出した状態で、墓室部分はほぼ残っているが墓口上部から墓堂前面にかけて削られて本来の外観面はすでに失われていた。したがって墓堂の形状や庭の有無などは不明である。墓口部分に琉球石灰岩礫を積み並べており本来墓口は閉じていたものと思われる。内部に蔵骨器や転用蔵骨器が検出されている。

第2章　遺物

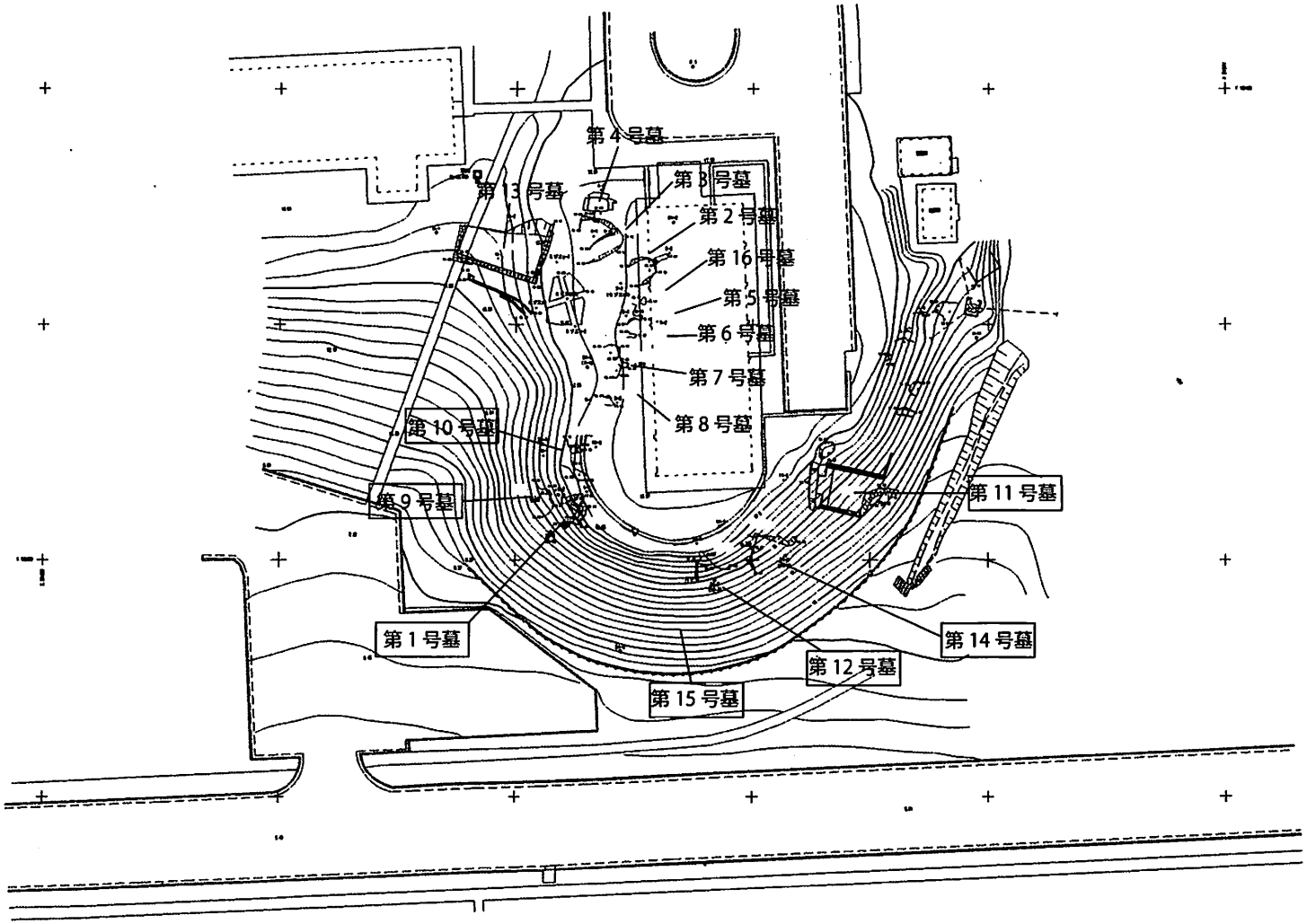
ここでは第1地区における出土遺物について、墓室内に安置もしくは安置していた蓋然性の高い蔵骨器および転用蔵骨器、墓口やサンミデー周辺に安置していた器物を掲げた（図版38～51）。

これら蔵骨器の身は下記のように分類した。



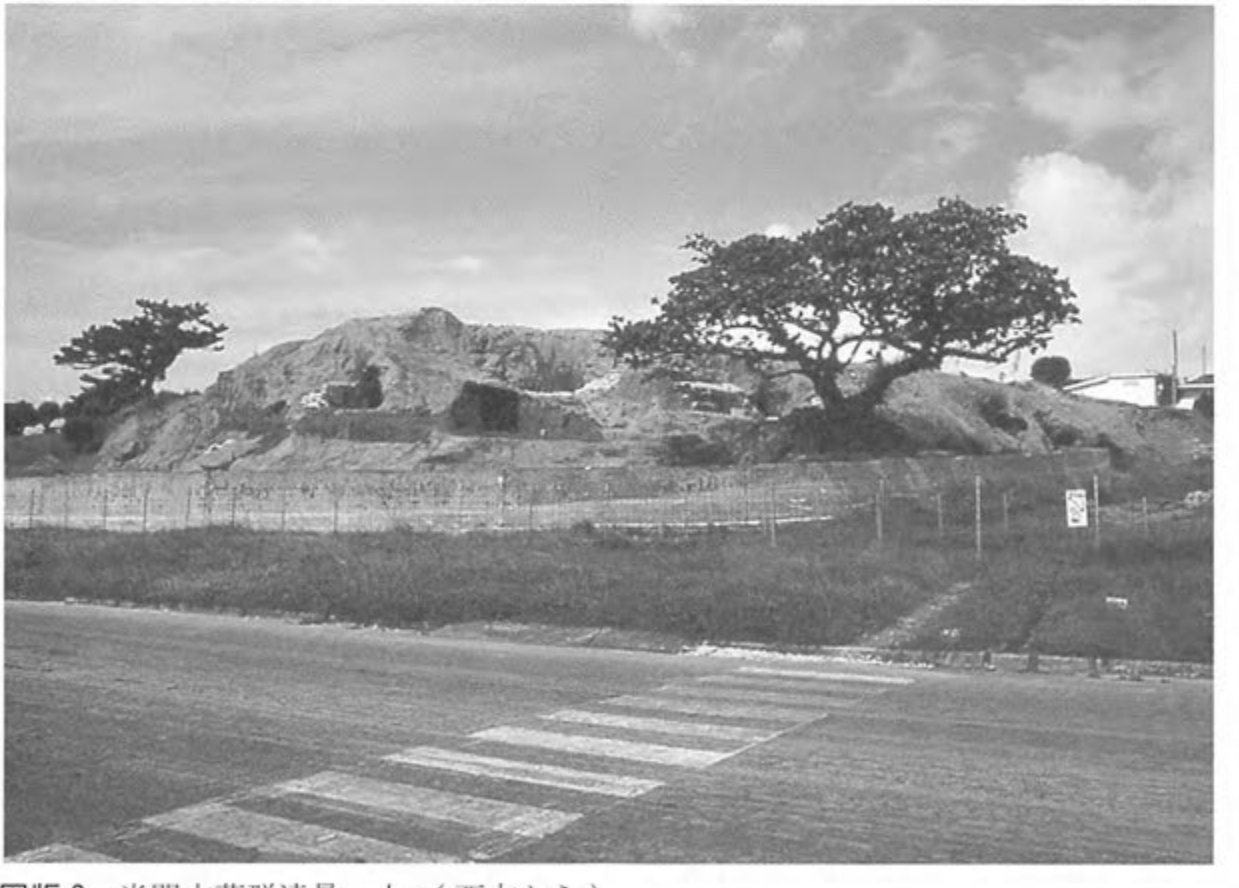
専用蔵骨器のうち、圧倒的に多いのは無頸甕形のもので、これらは一般にボージャーと呼ばれるタイプである。有頸甕形としたいわゆるマンガンタイプのものは非常に少なかった。

本遺跡でみられる転用蔵骨器は壺が多く、その他土器もみられた。また、褐釉陶器を使用したものもあったが、伝世品を使用した可能性がある。墓室外で出土した瓦質土器は蔵骨器としての使用されたのか明らかでない。検出状況からすると香炉などに使用されたものと考えられる。

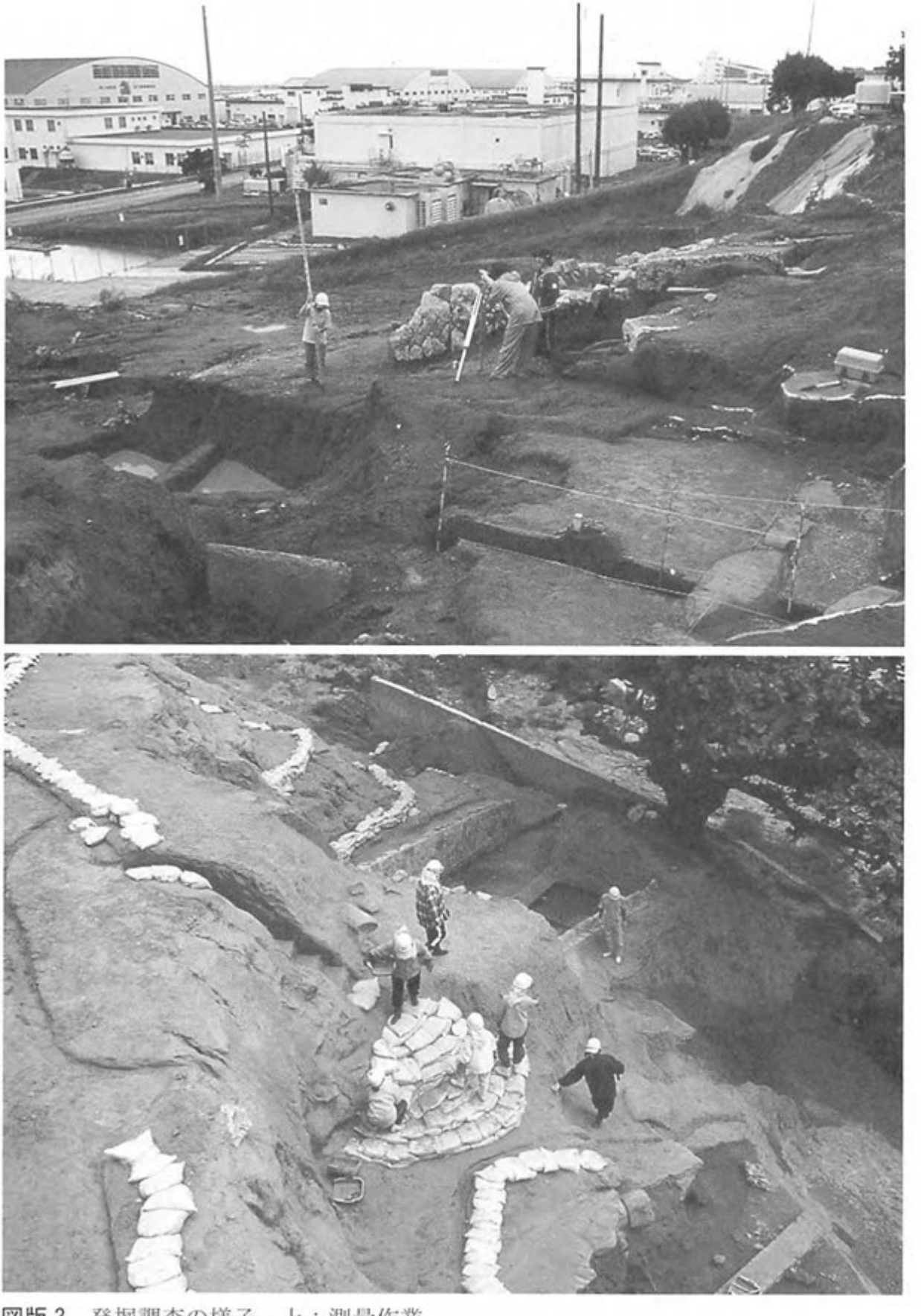


第1図 各古墓の位置（□内は第Ⅰ地区の古墓、□なしは第Ⅱ地区の古墓）

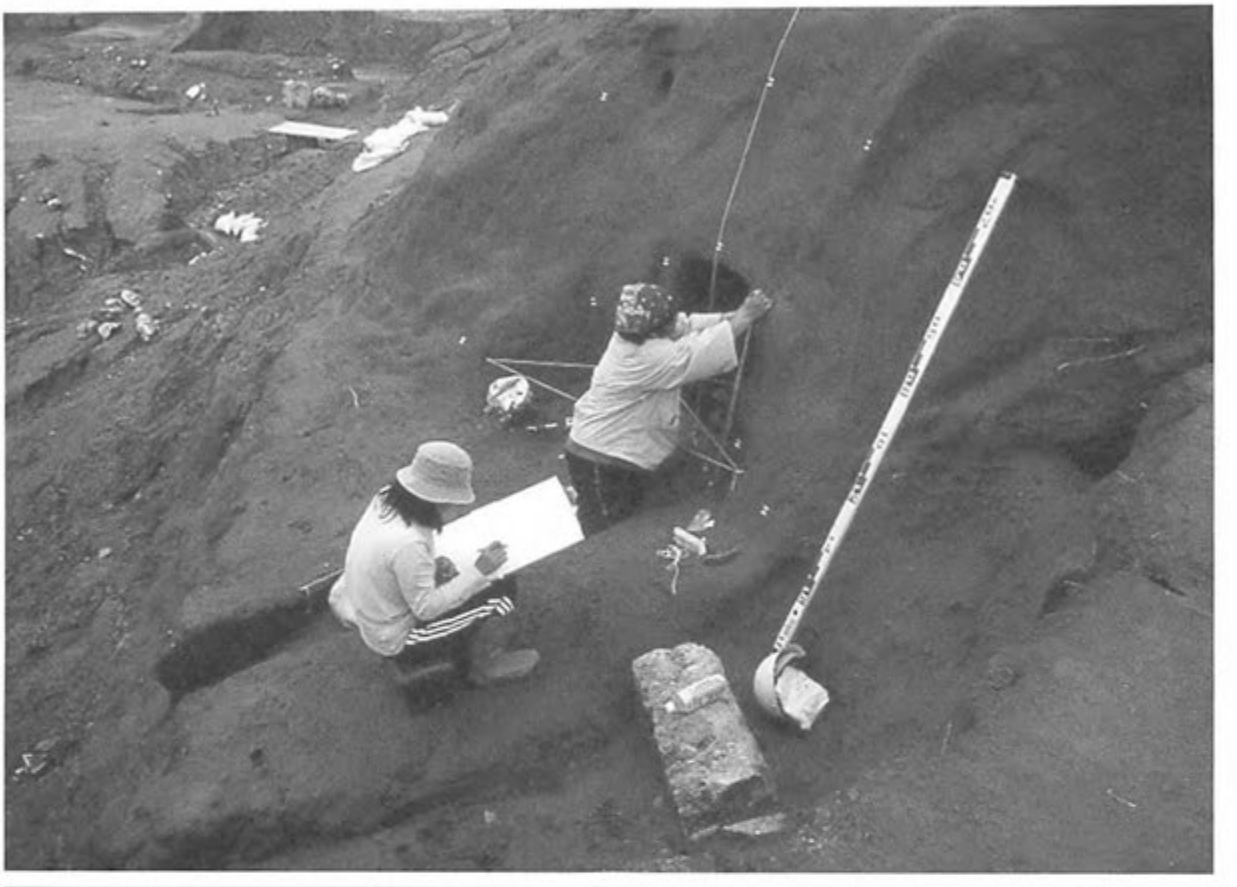
図版 1　当間古墓群遠景　上：（南方から）
当間古墓群遠景　下：（北方から）



図版 2　当間古墓群遠景　上：（西方から）
下：同　上

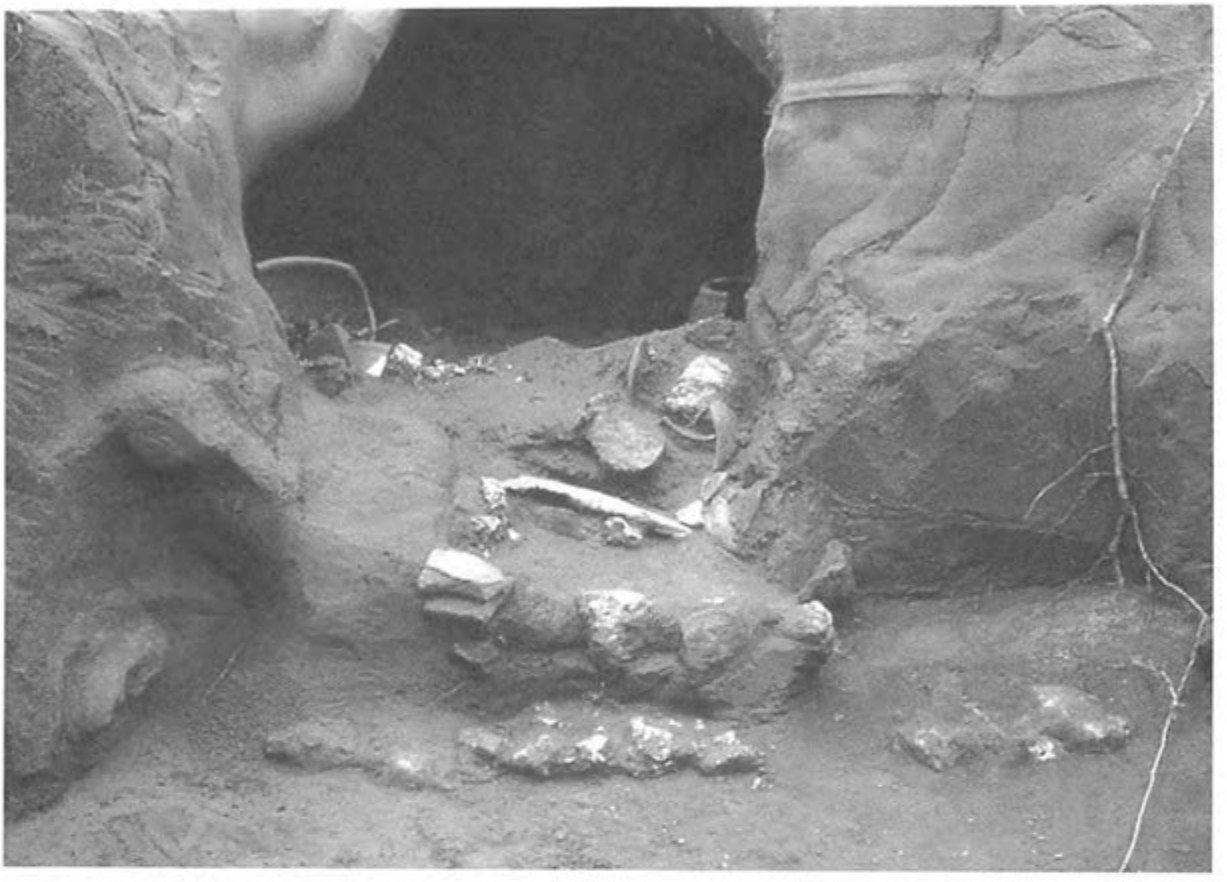


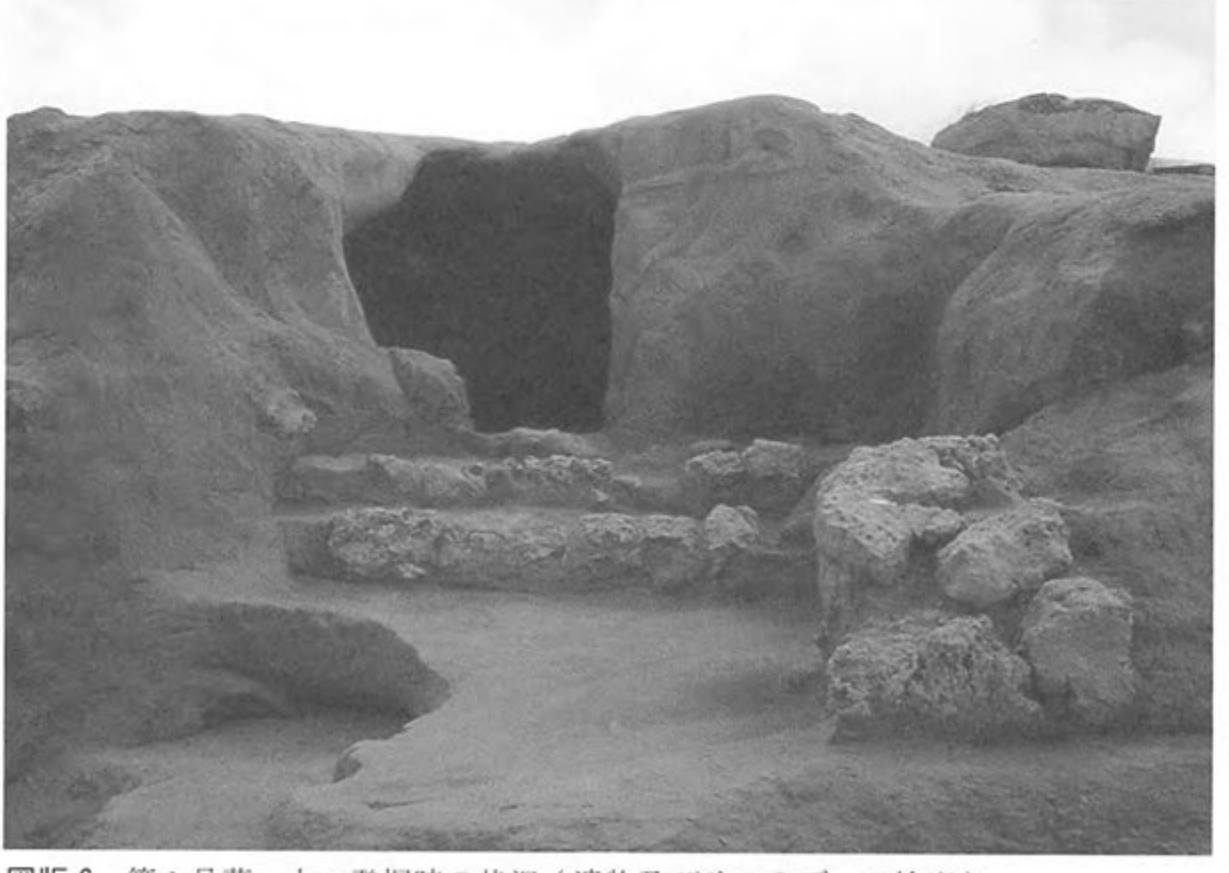
図版 3　発掘調査の様子　上：測量作業
下：堀方作業



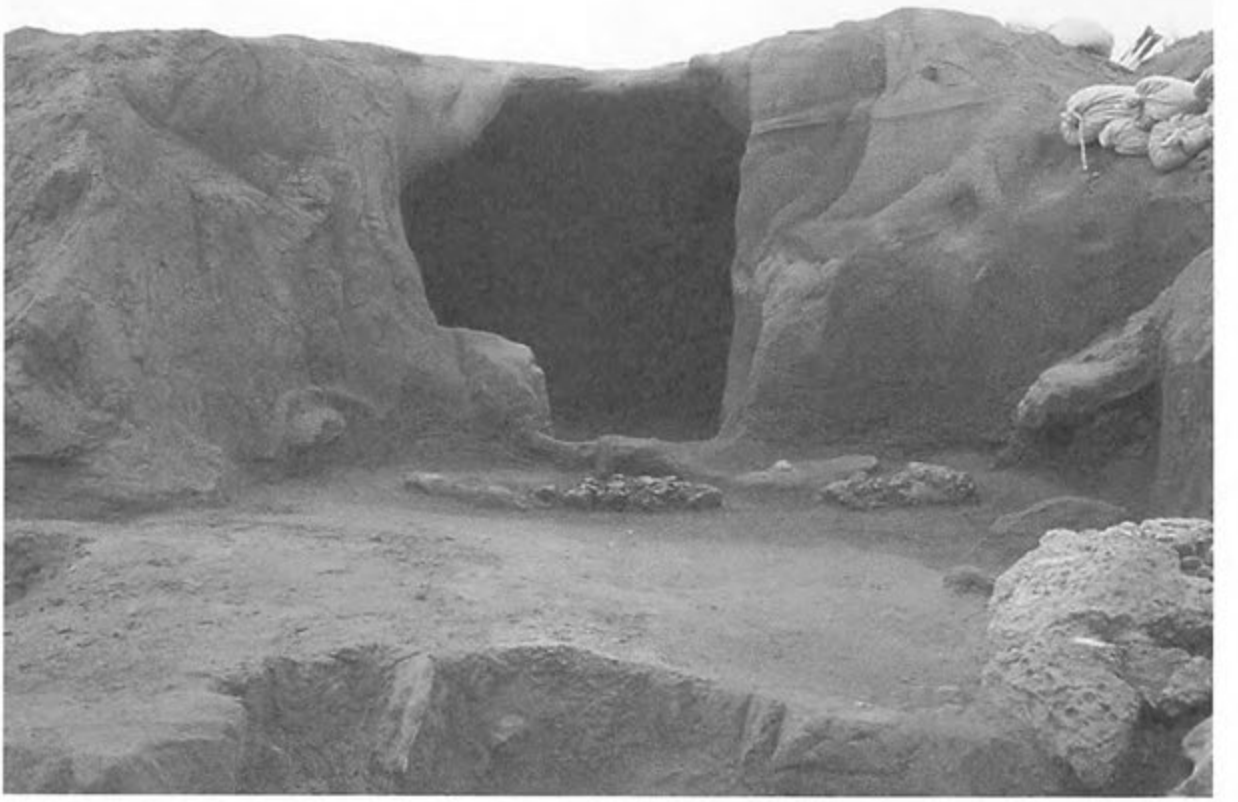
図版 4　発掘調査の様子　上：遺構実測作業
下：遺構俯瞰写真撮影

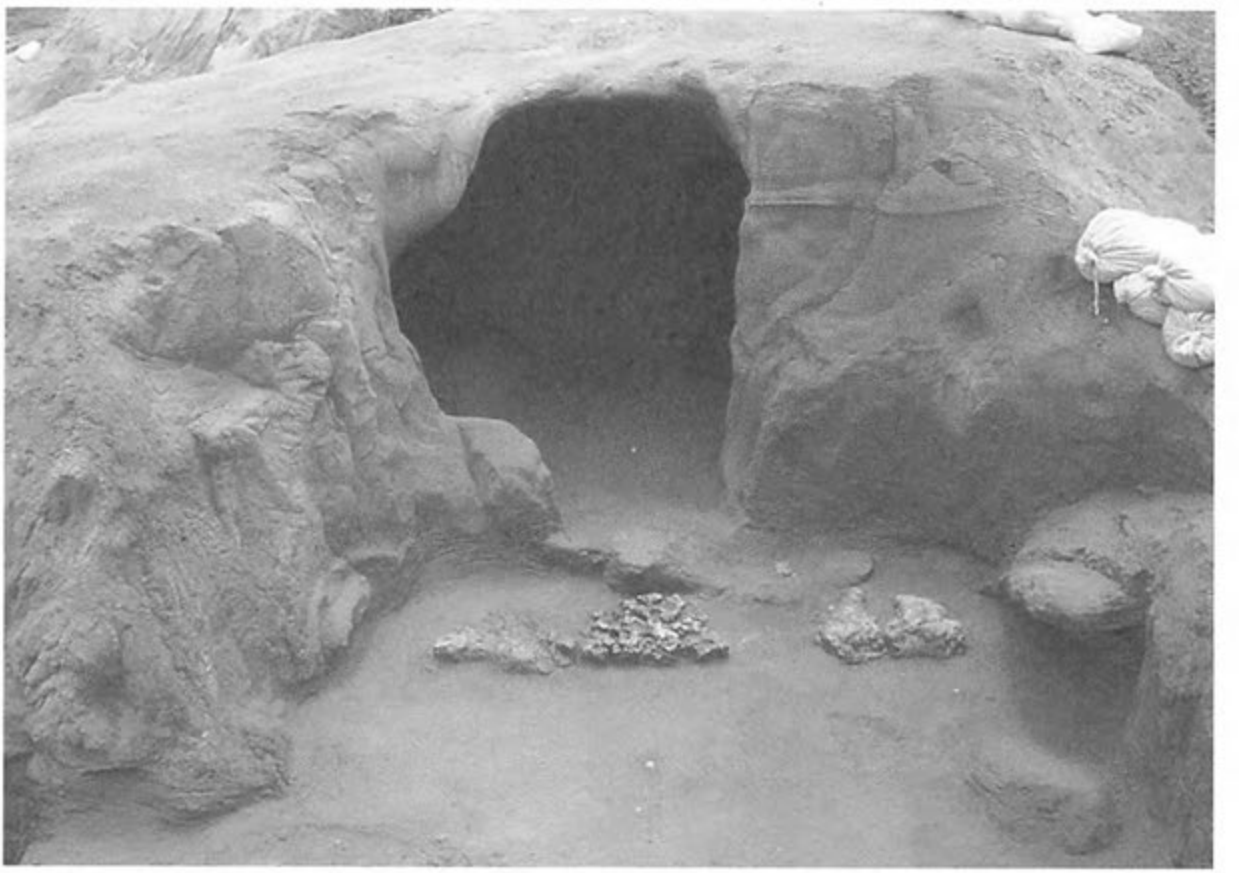
図版 5　第 1 号墓　上：発見時の状況（外観）
下：発見時の状況（墓室内）



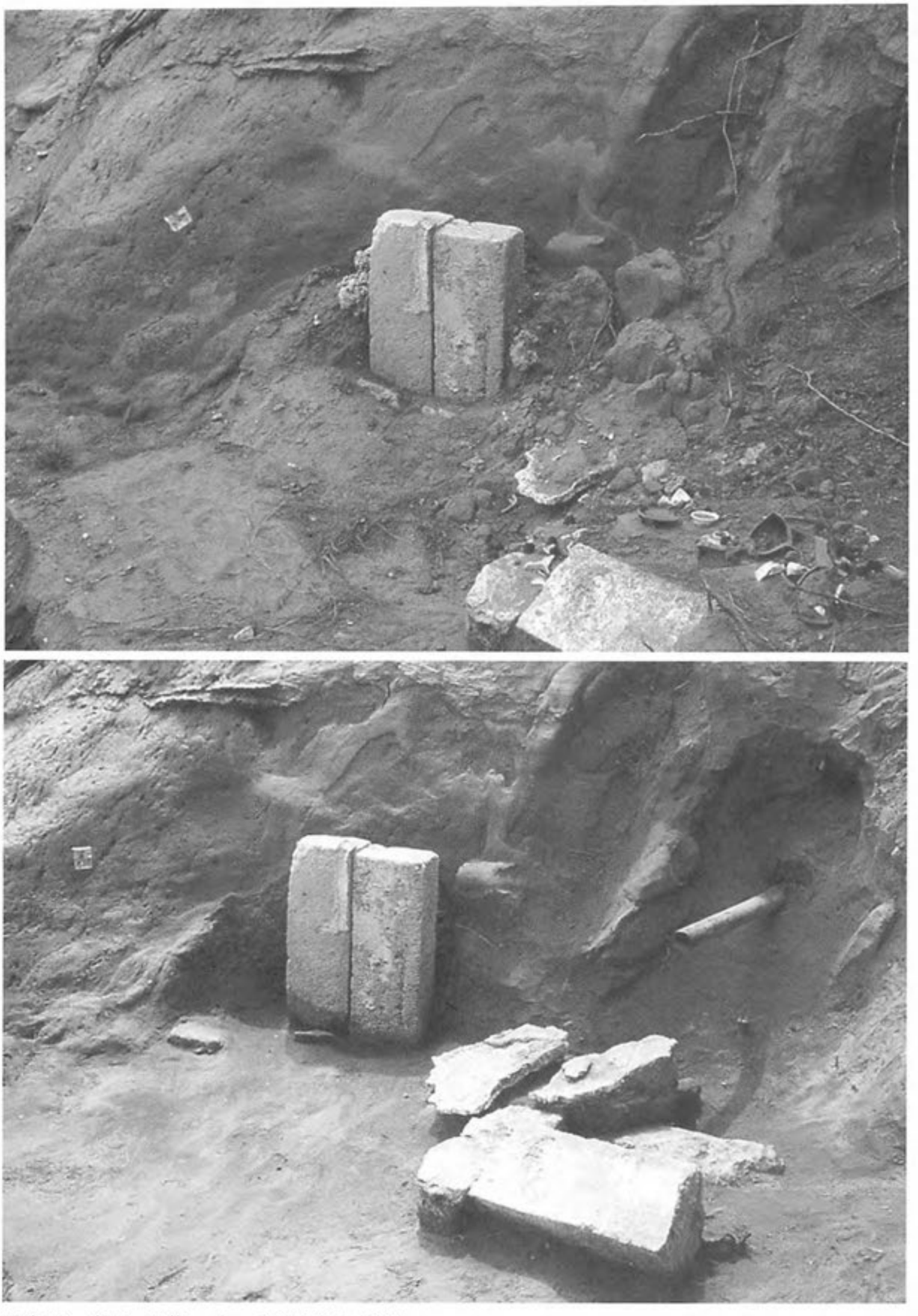


図版 6　第 1 号墓　上：発掘時の状況（遺物及びサンミデーの検出）
下：同　上

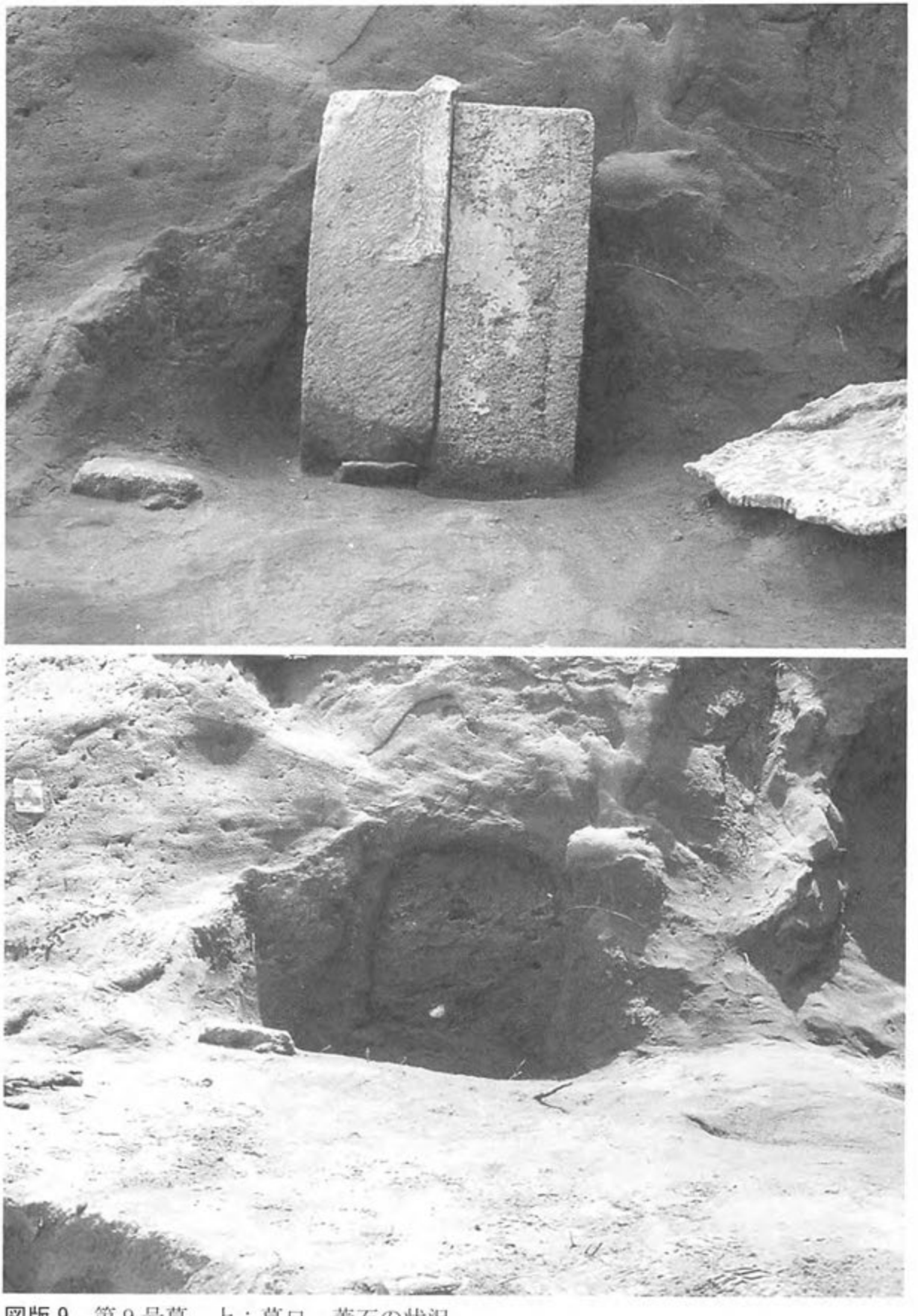




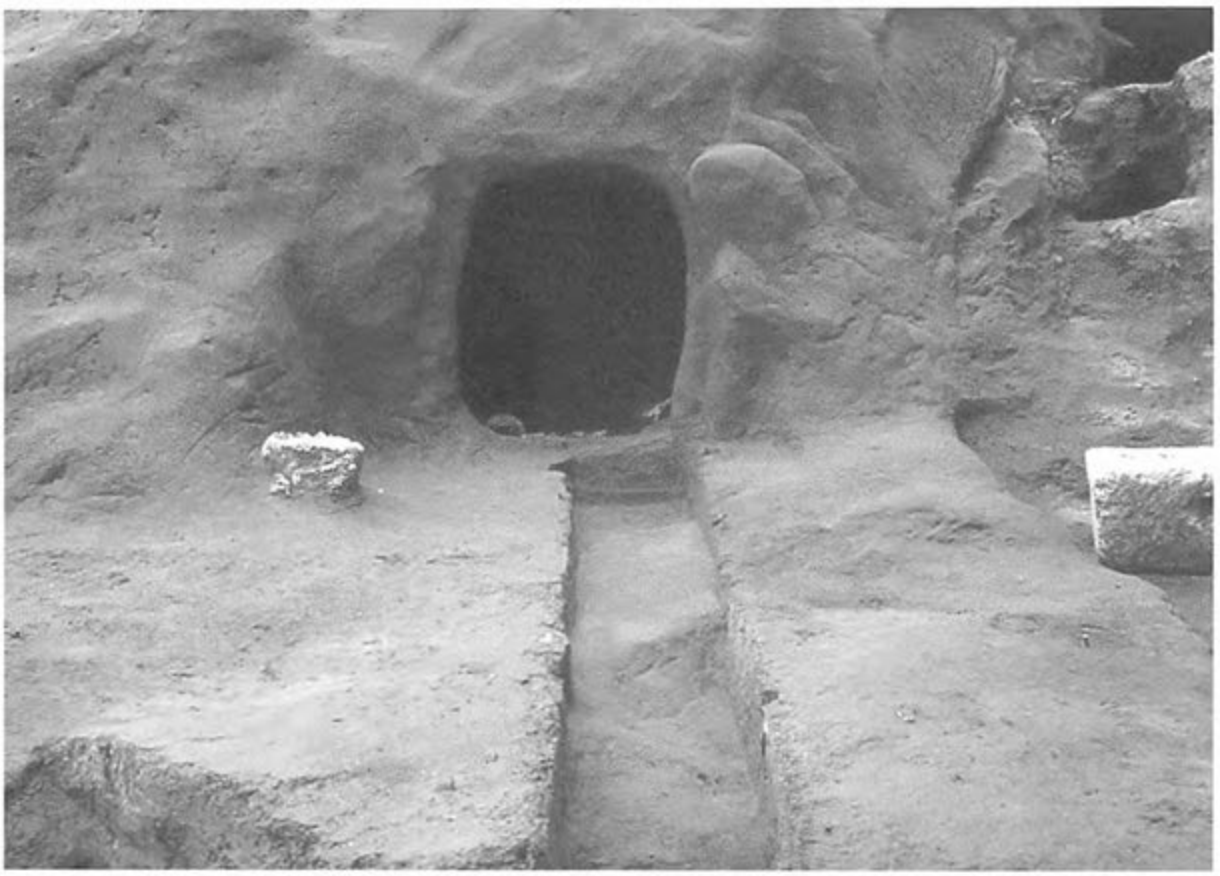
図版 7　第 1 号墓　上：完掘の状況
下：同　上



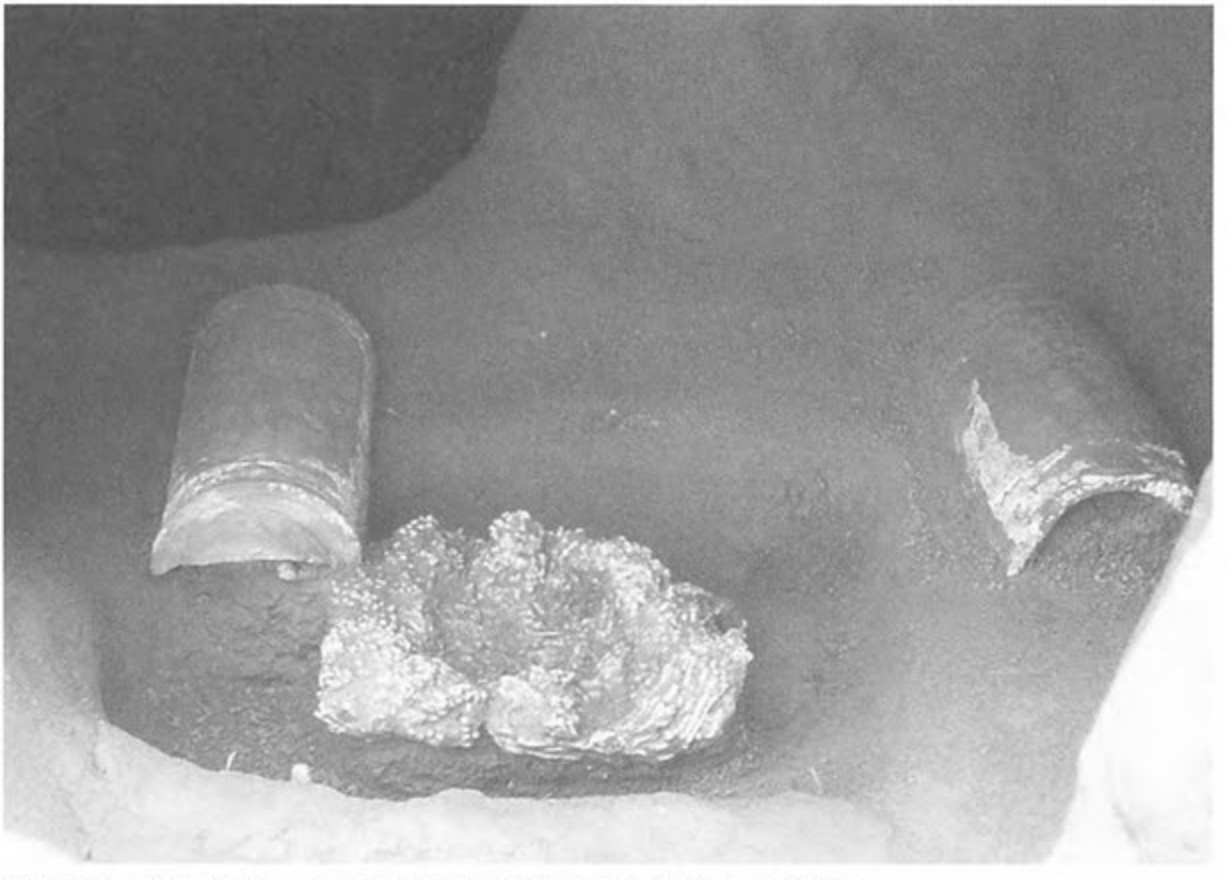
図版 8　第 9 号墓　上：発見時の状況
下：発掘時の状況



図版 9　第 9 号墓　上：墓口，蓋石の状況
下：墓石除去後の状況



図版 10　第 9 号墓　上：完掘の状況
下：同　　上

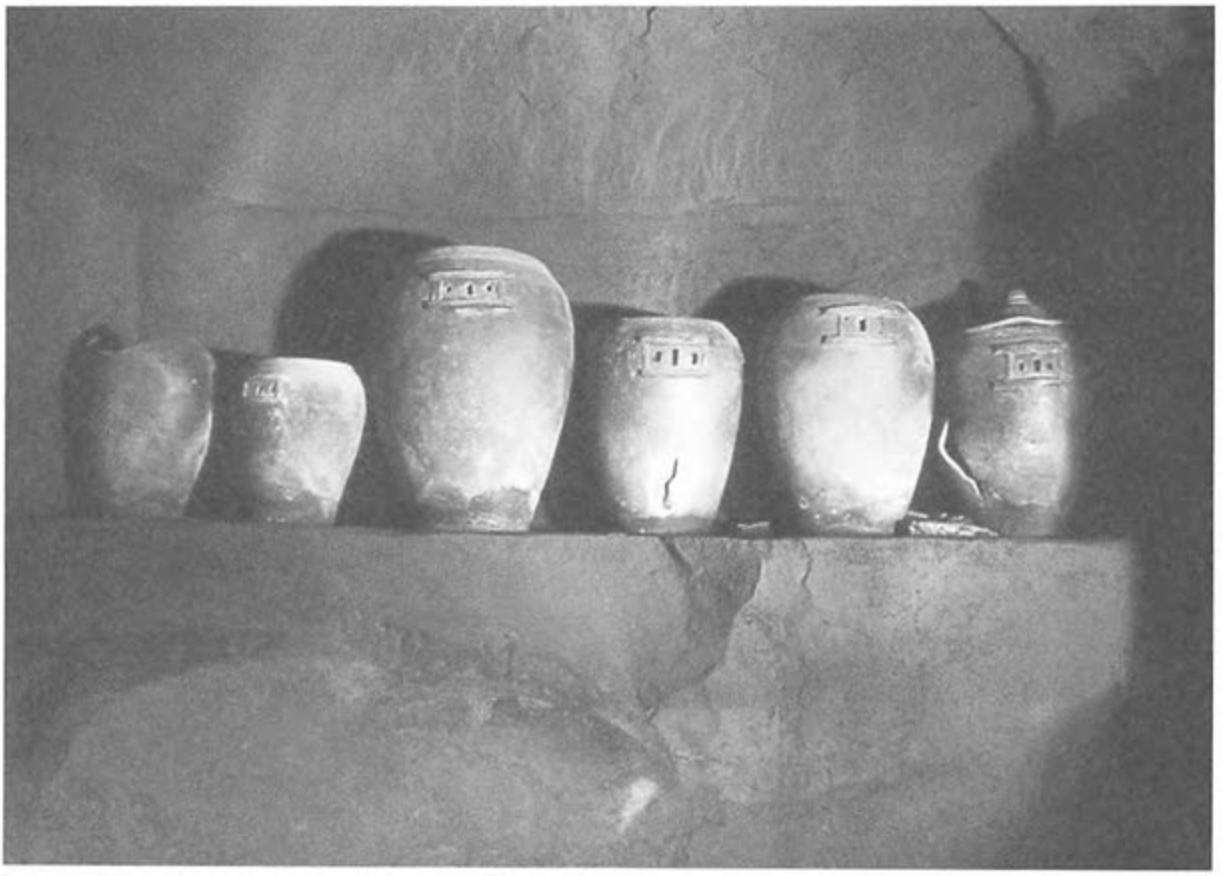


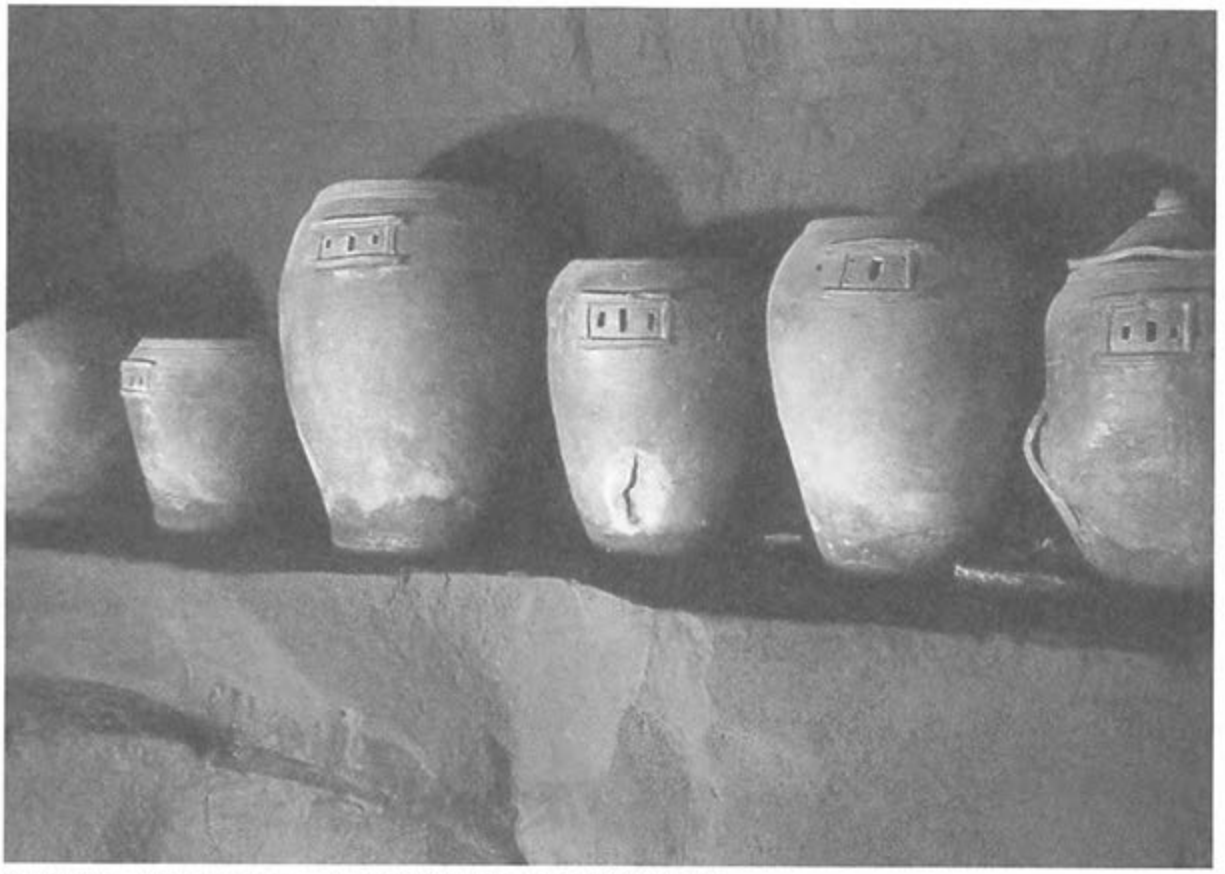
図版 11　第 9 号墓　上：墓室内の状況（棺の据え台の検出）
下：同上

図版 12　第 10 号墓　上：発見時の状況
下：調査 時の状況（墓口の蓋石・サンミデーの検出）

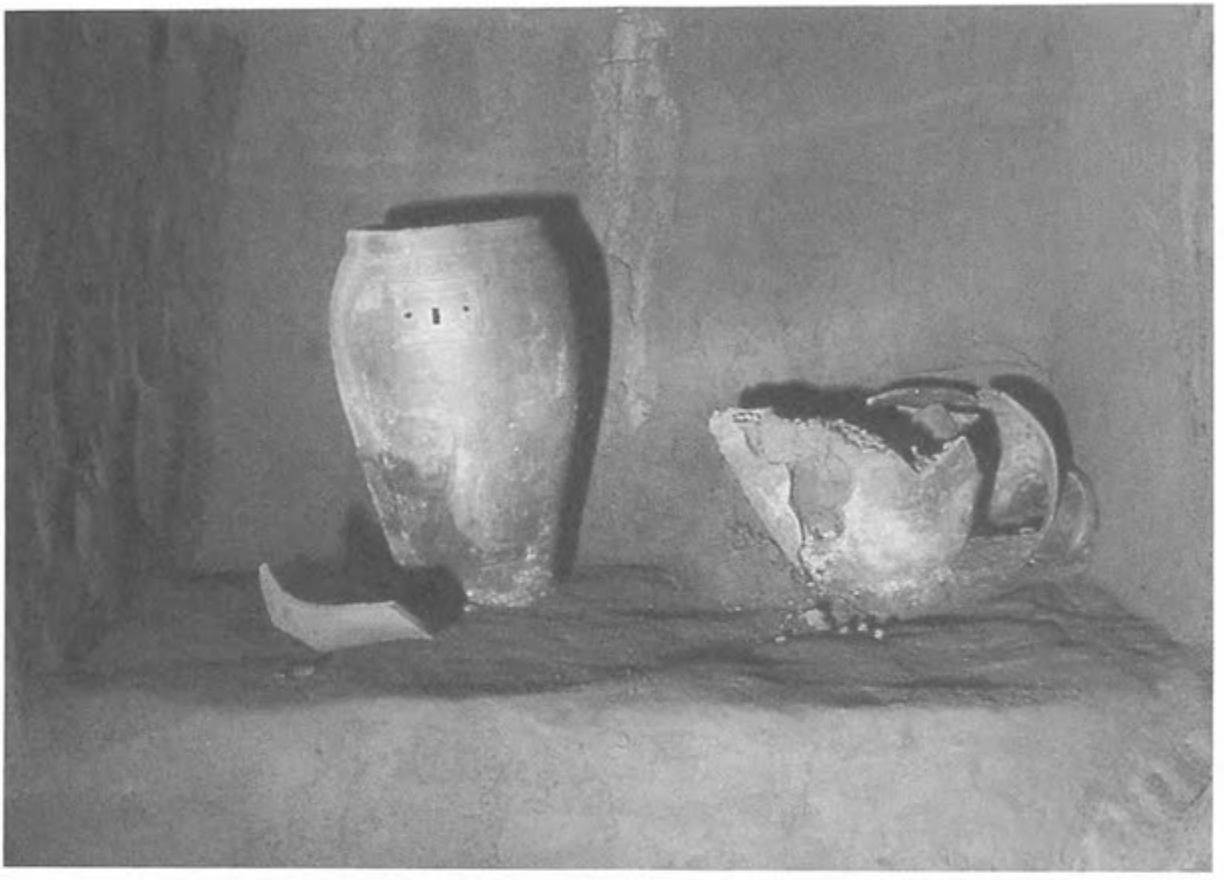
図版 13　第 10 号墓　上：調査時の状況（墓庭サンゴ礫敷きの検出）
下：同上

図版 14　第 10 号墓　上：墓庭サンゴ礫敷きの状況
下：同上

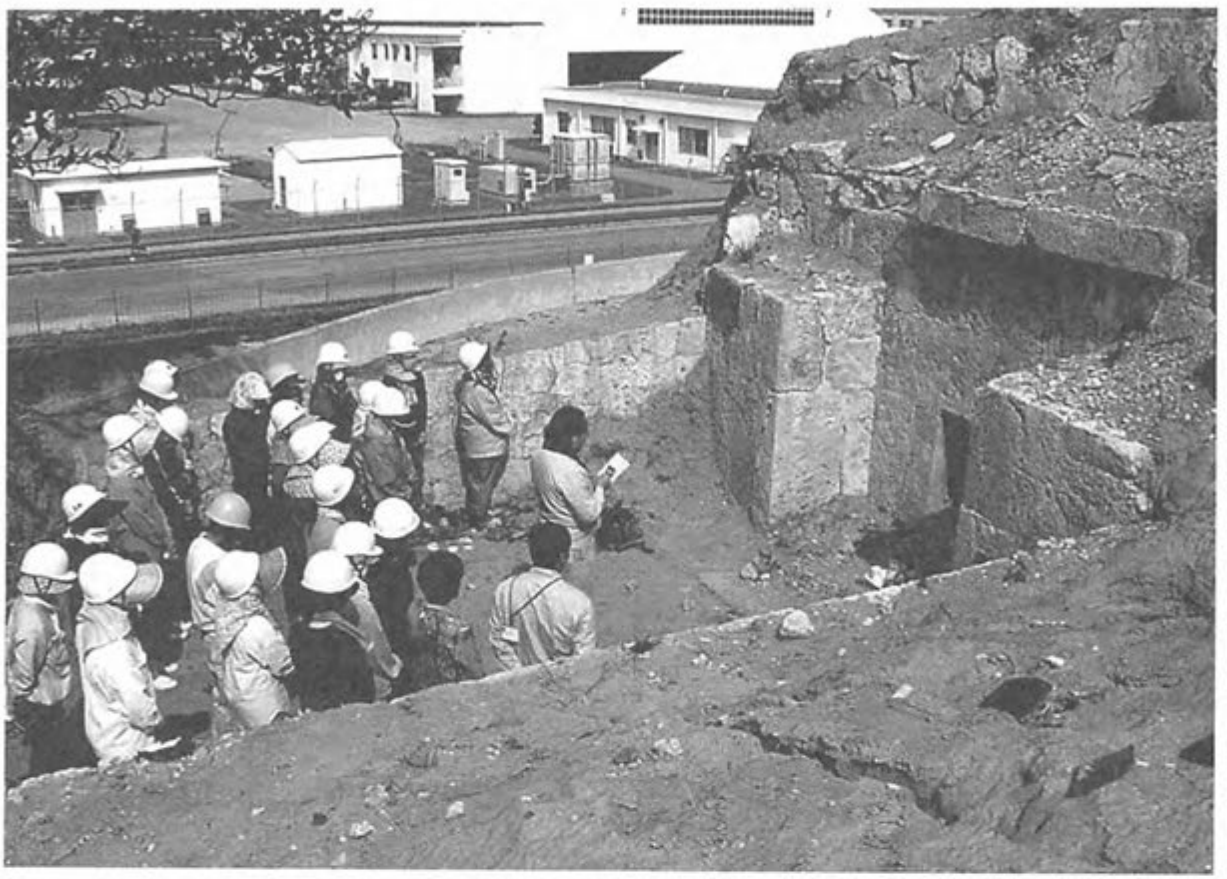




図版 15　第 10 号墓　上：墓室内蔵骨器の検出状況
下：同上



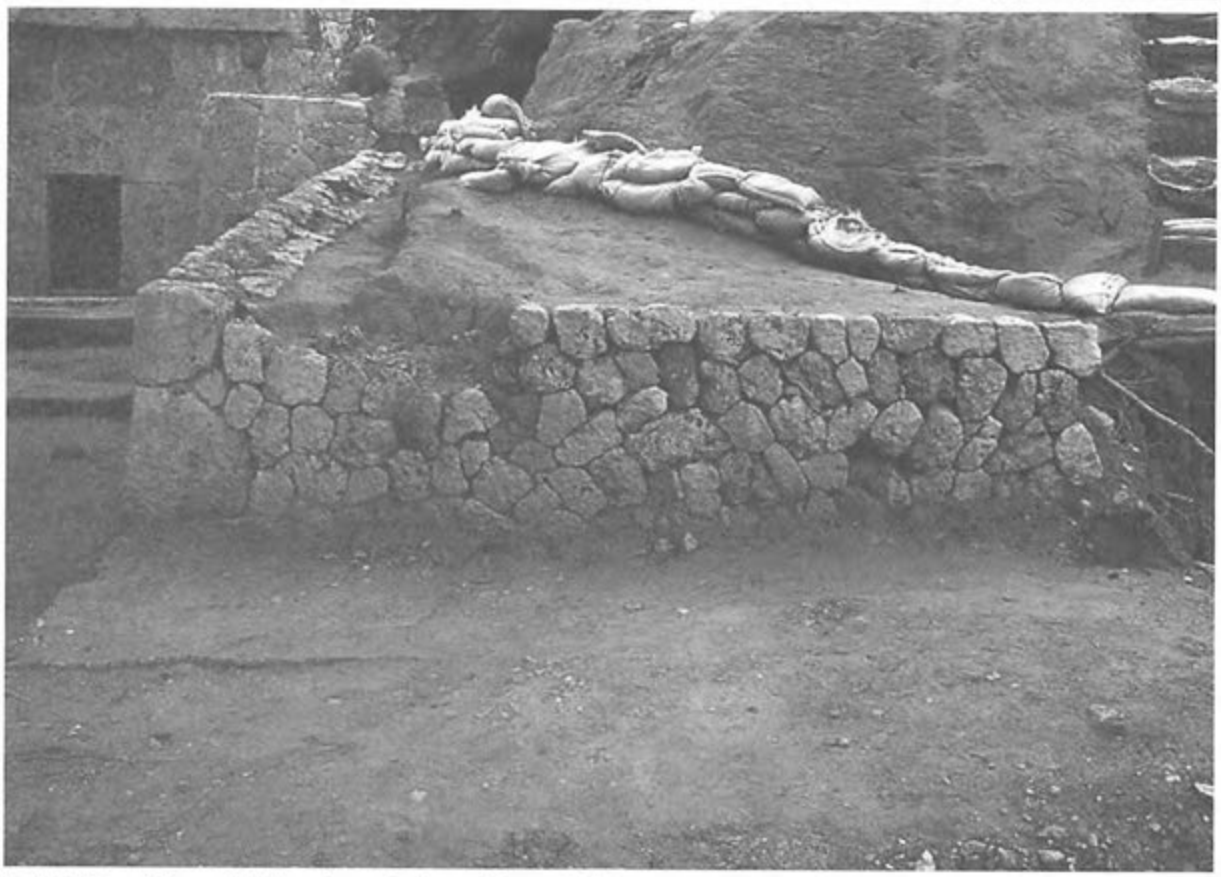
図版 16　第 10 号墓　上：墓室内蔵骨器の検出状況
下：同上



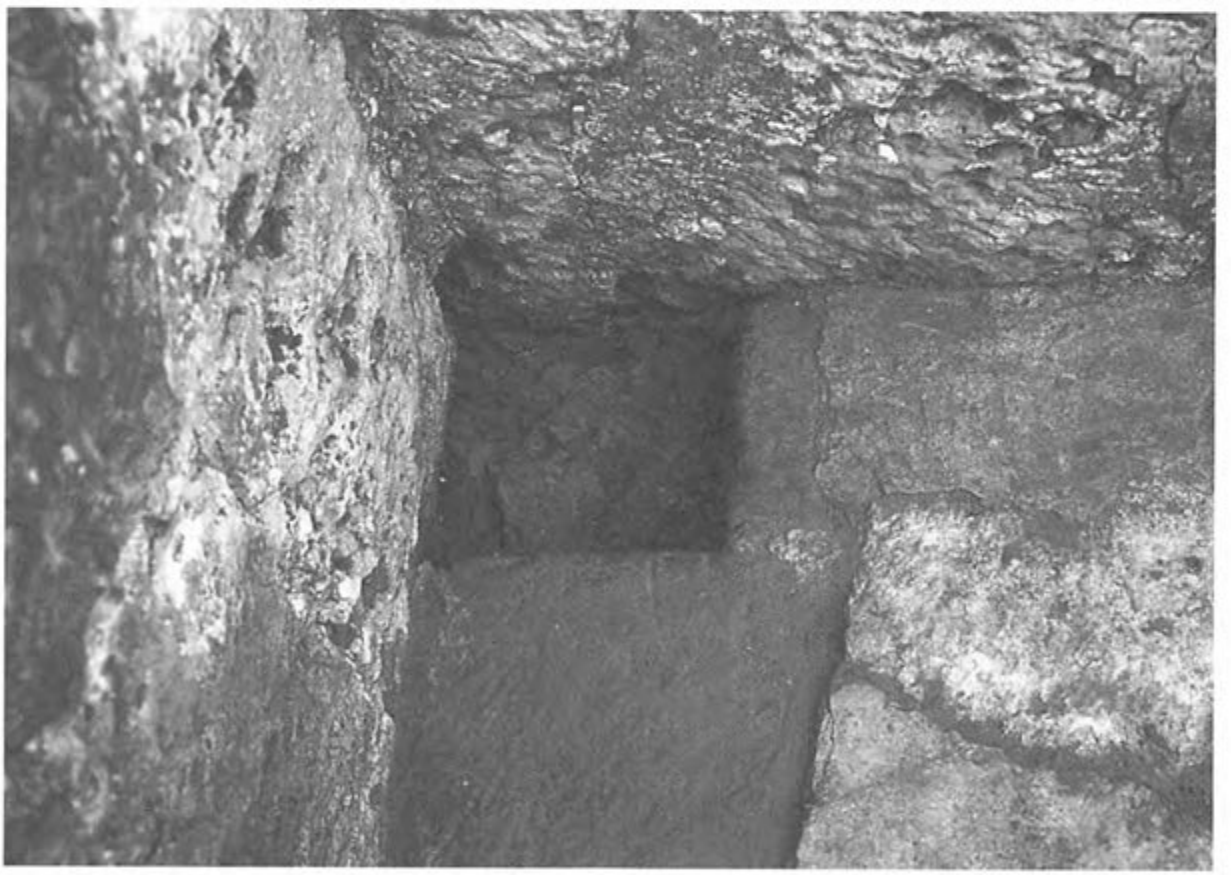
図版 17　第 11 号墓　上：作業前の安全祈願
下：発見時の状況

図版 18　第 11 号墓　上：発掘時の状況
下：完掘の状況（墓堂）

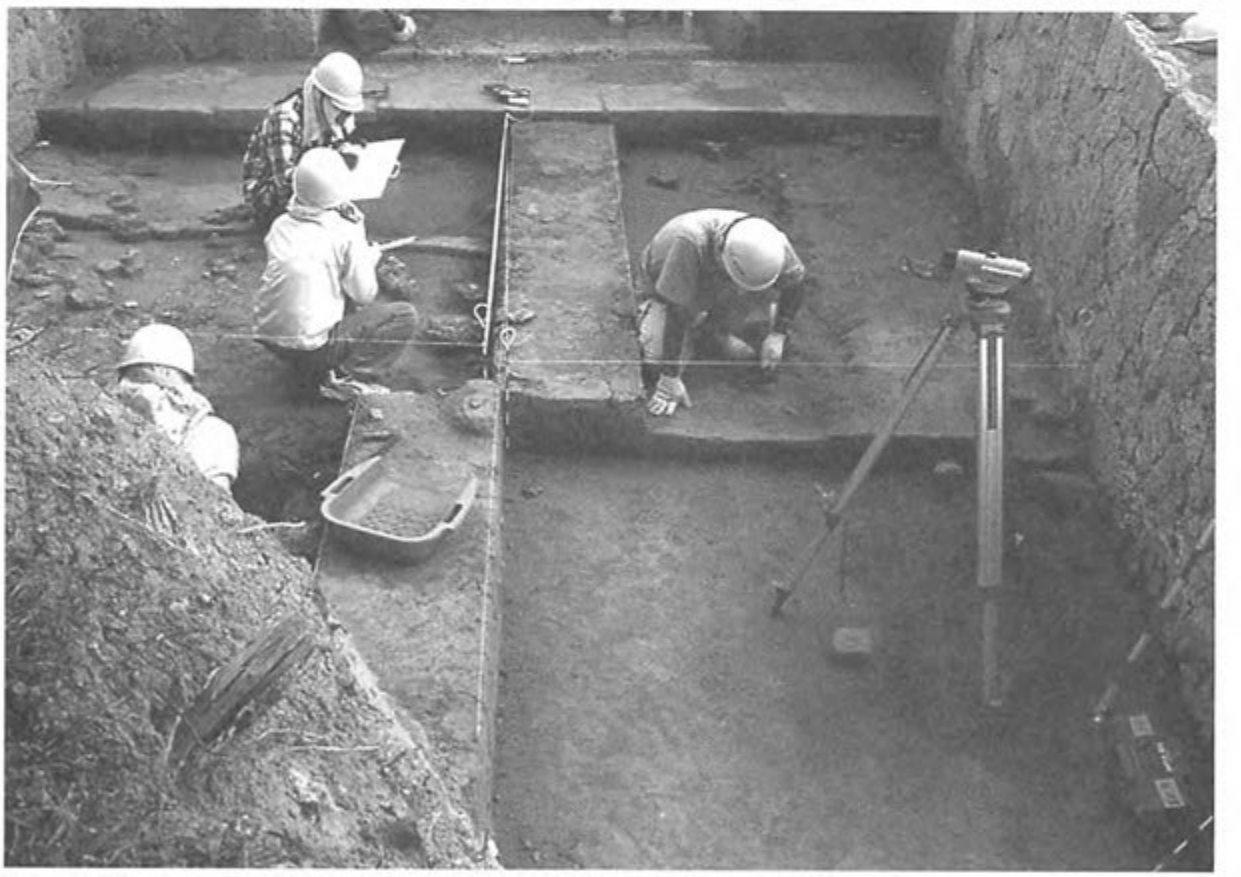
図版 19　第 11 号墓　上：完掘の状況（墓庭石積み）
下：同上



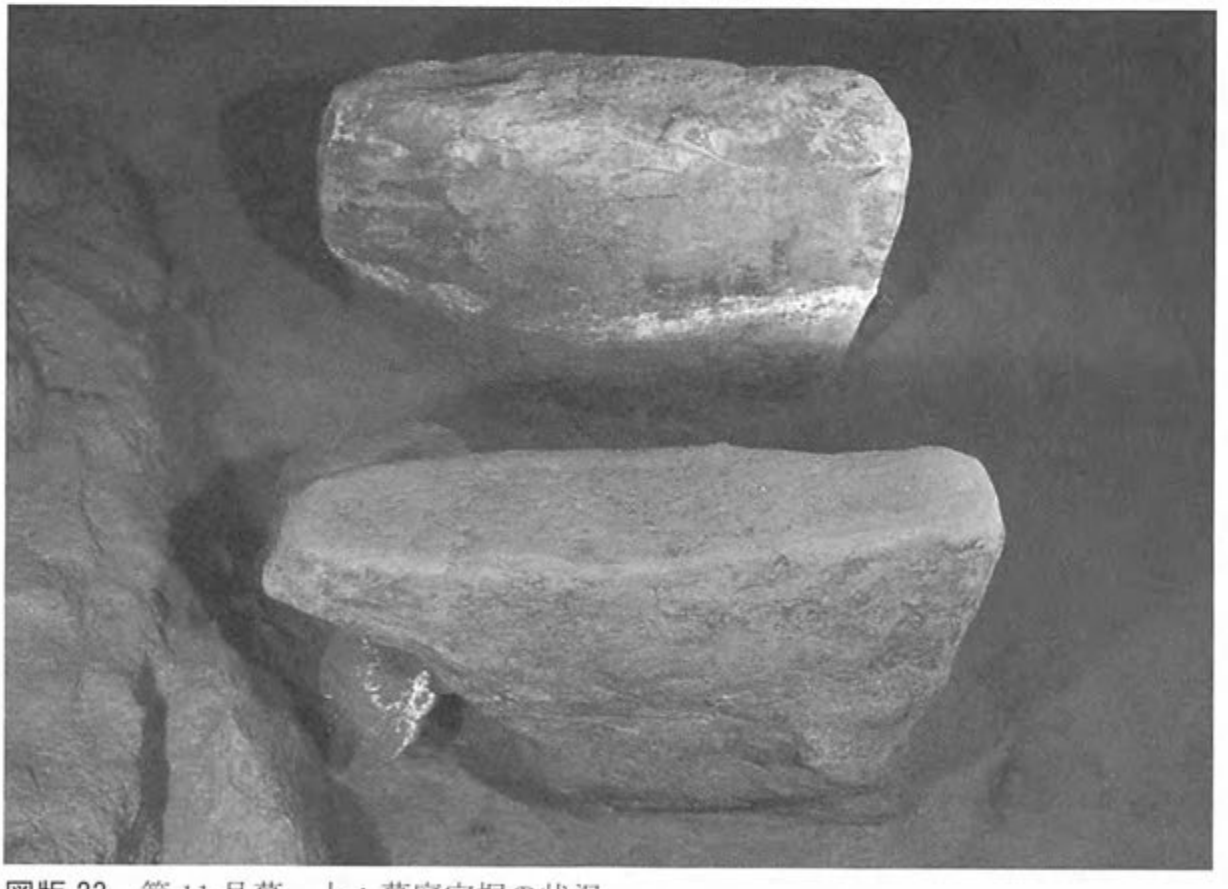
図版 20　第 11 号墓　上：完掘の状況（墓堂及びサンミデー）
下：完掘の状況（墓庭外石積み）



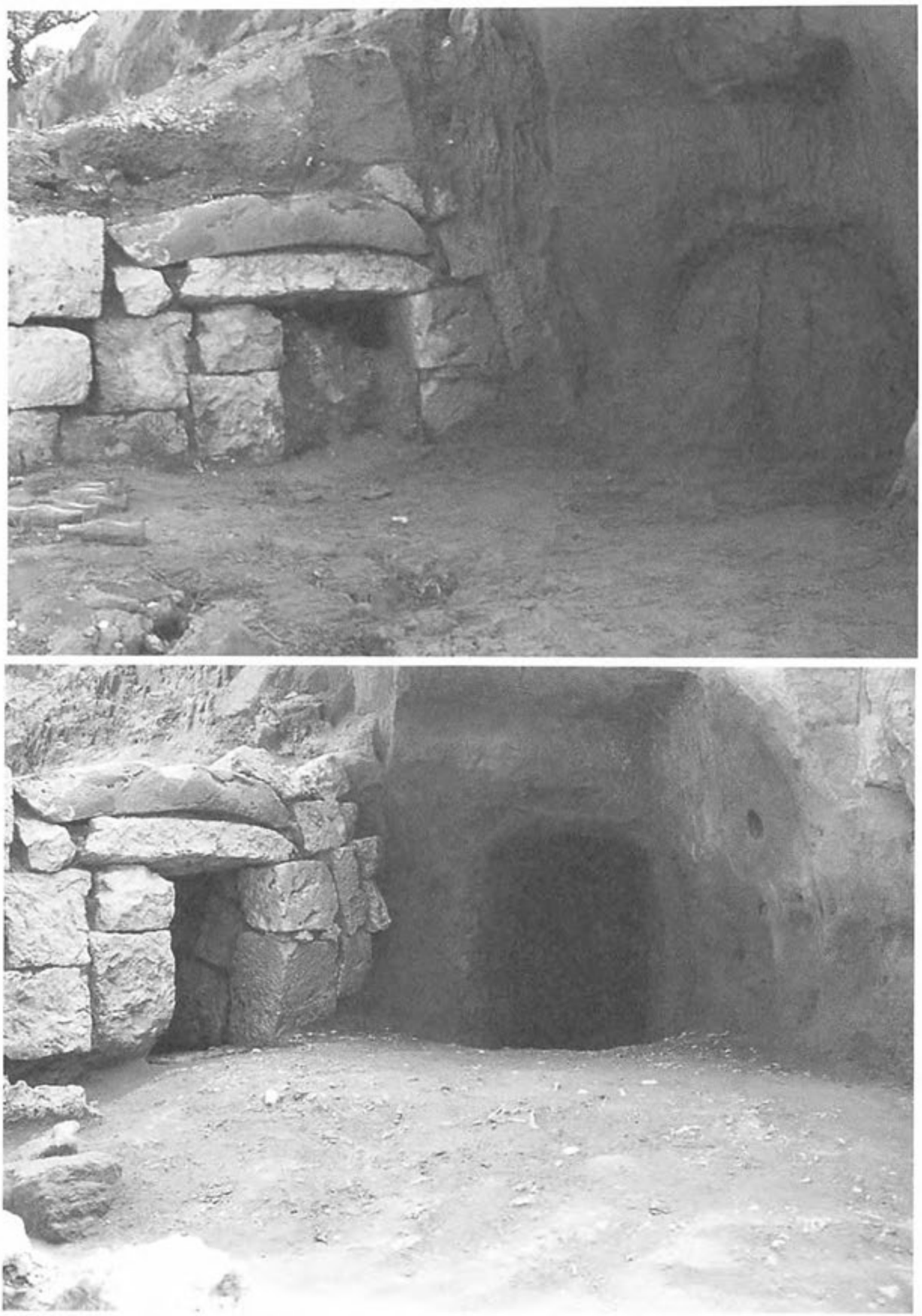
図版 21　第 11 号墓　上：サンミデー隅の炉
下：同　上



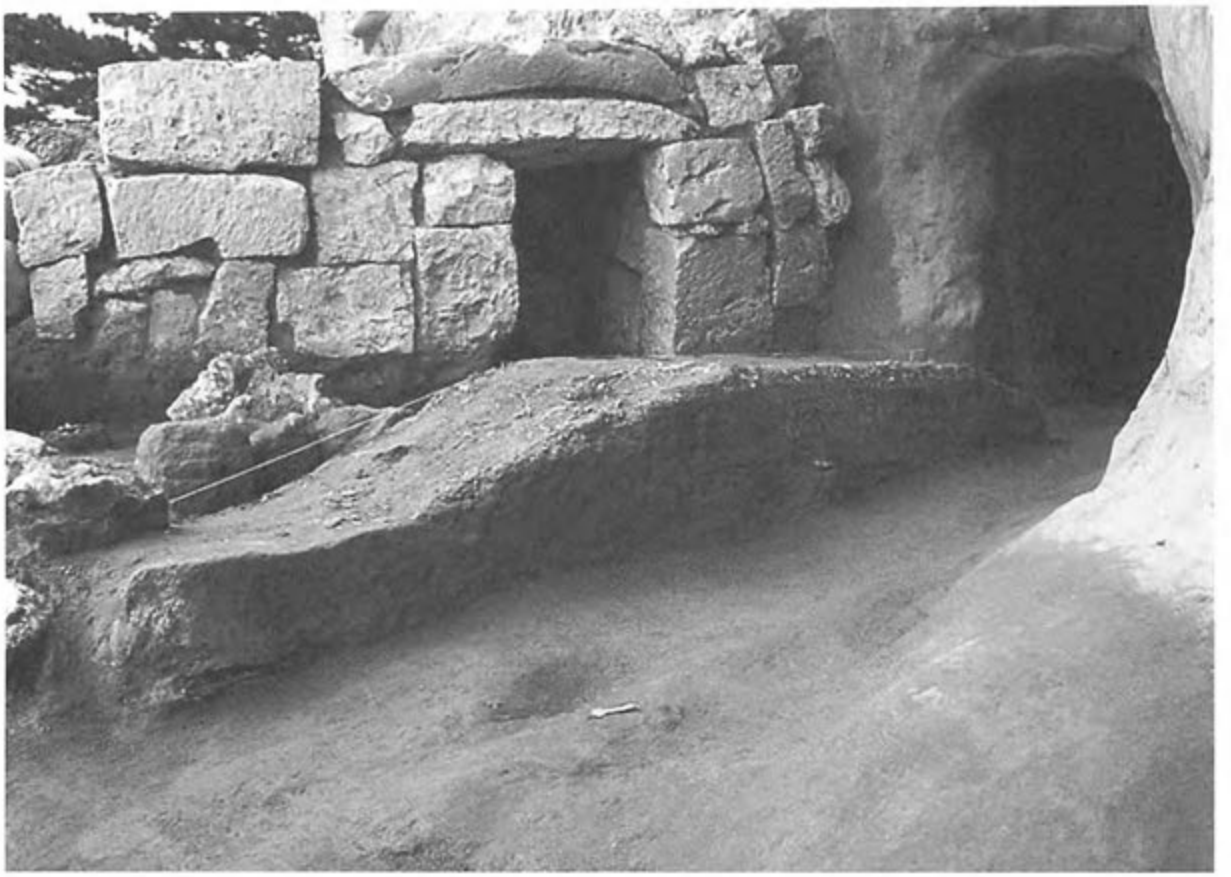
図版 22　第 11 号墓　上：墓庭発掘時の状況
下：同　上



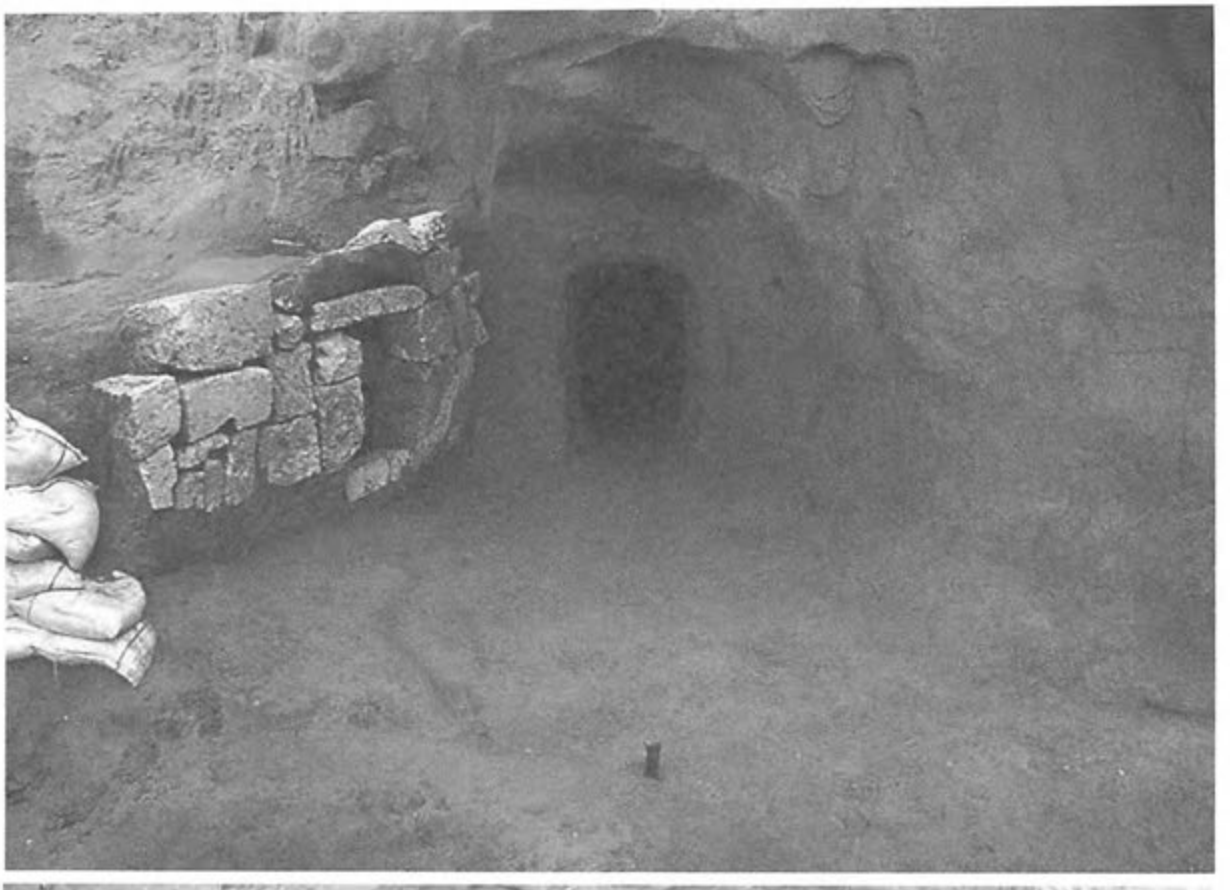
図版 23　第 11 号墓　上：墓庭完掘の状況
下：墓室内の状況（棺の据え台の検出）

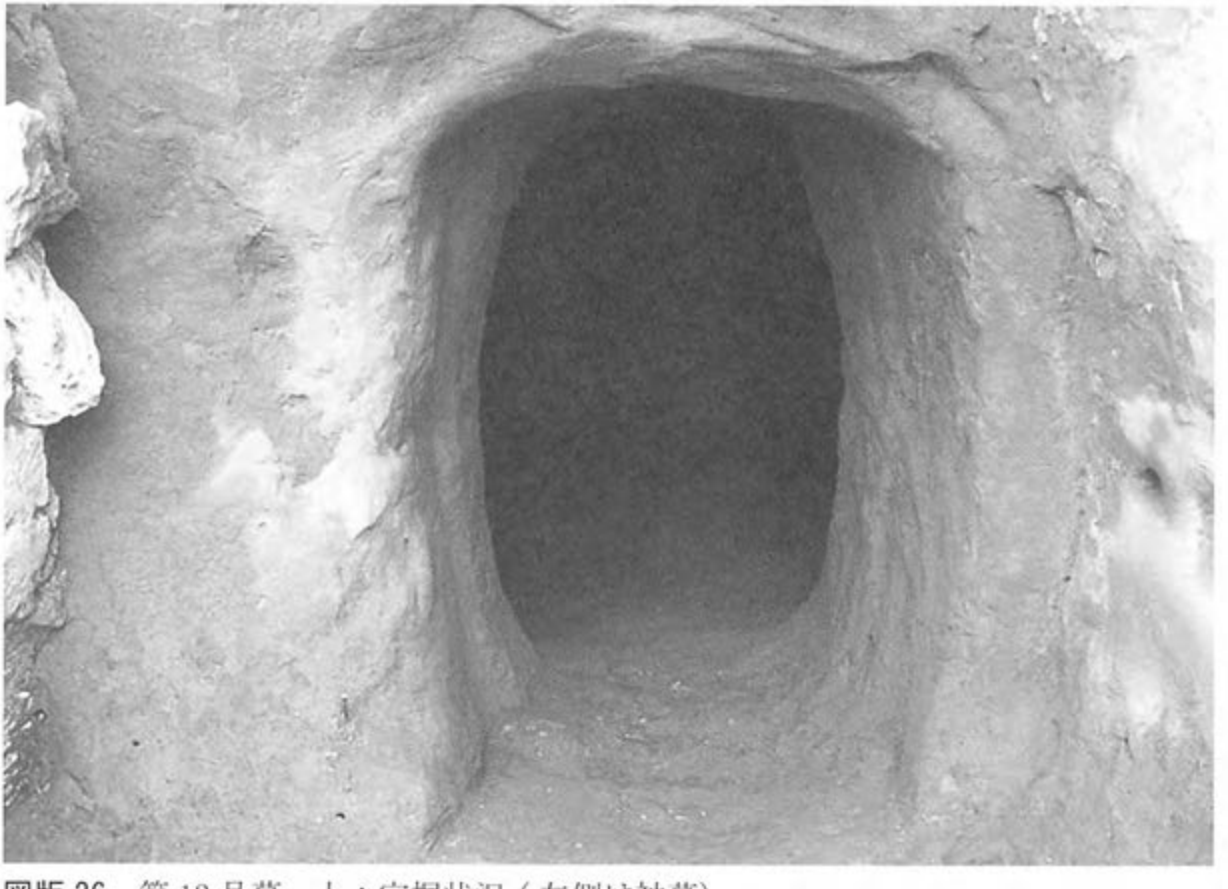


図版 24　第 12 号墓（及び袖墓）上：発見時の状況（右側壁面に墓口検出）
下：発掘時の状況

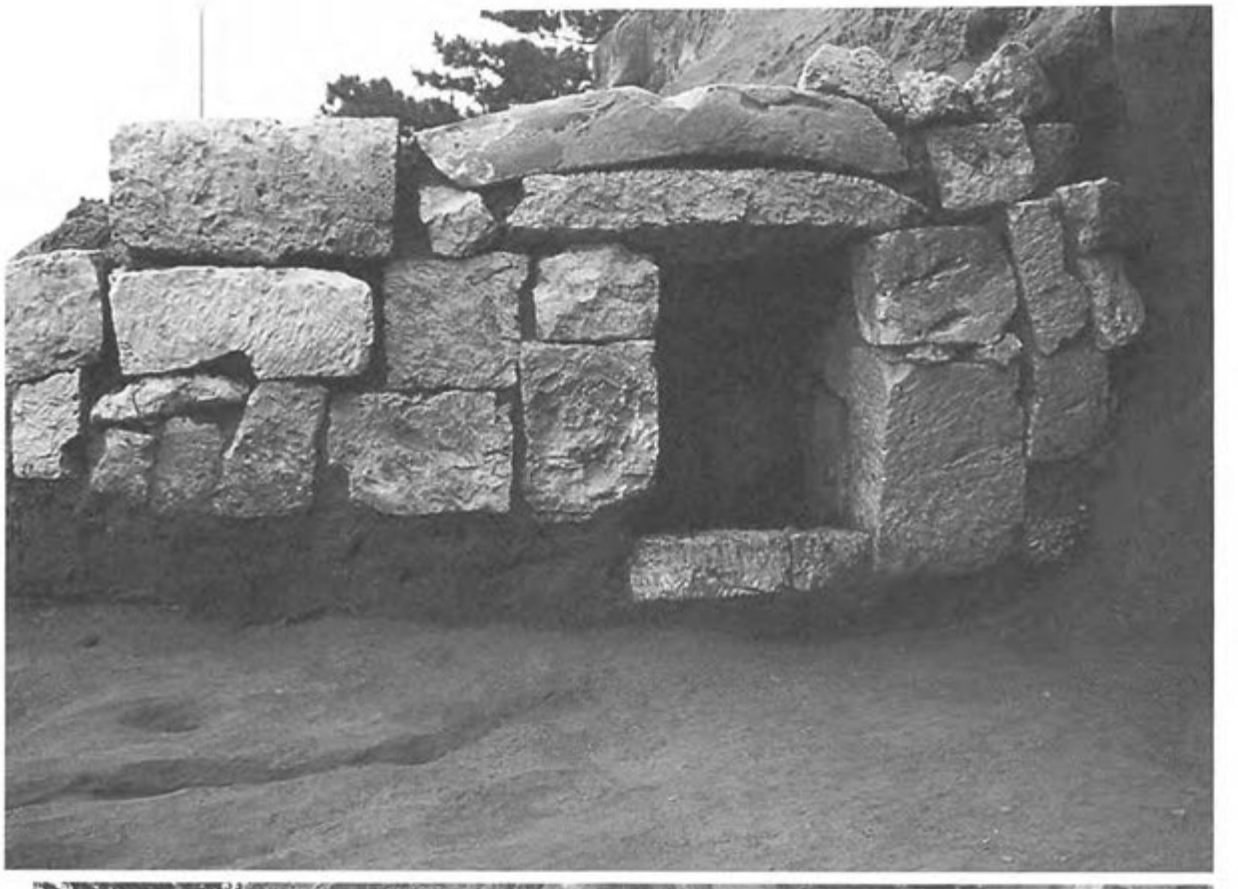


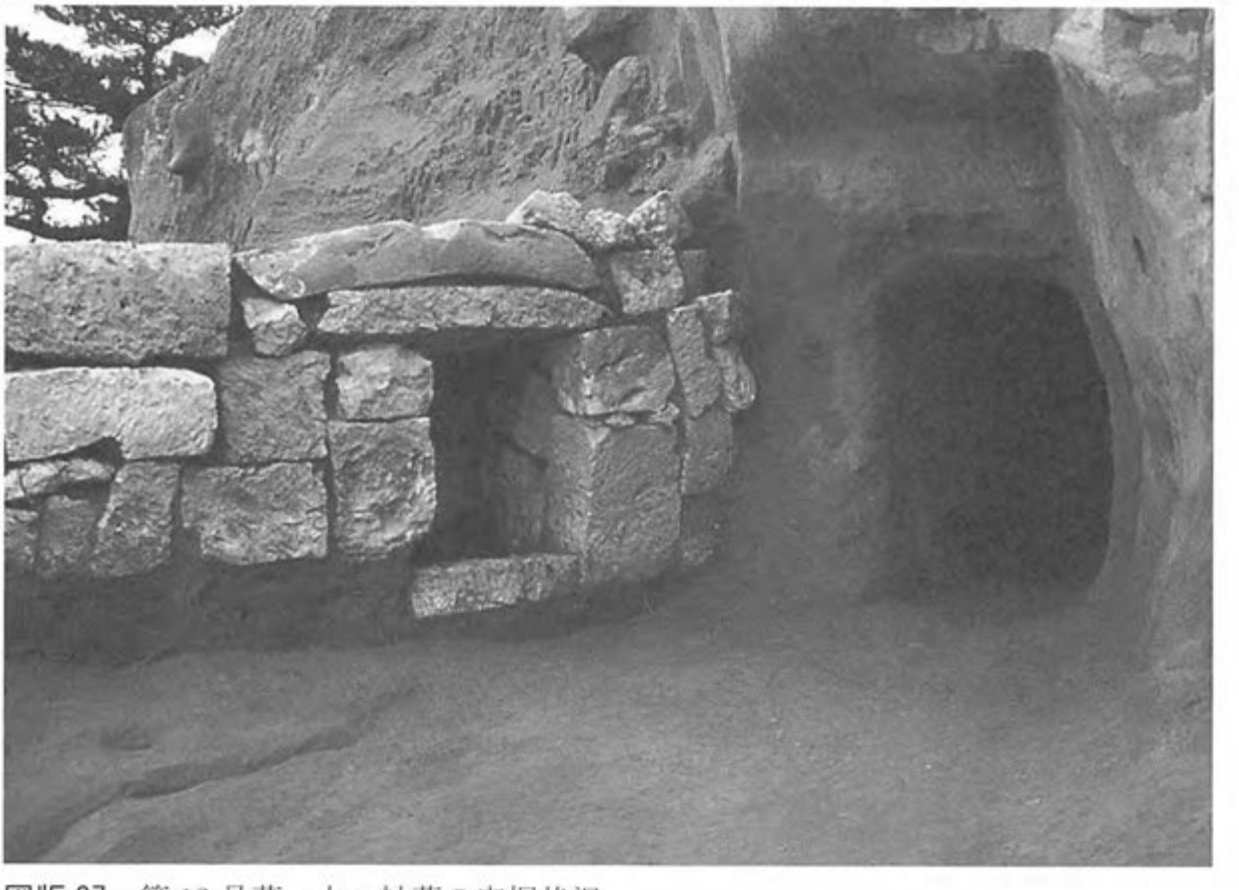
図版 25　第 12 号墓　上：墓庭の土層堆積状況
下：同　上





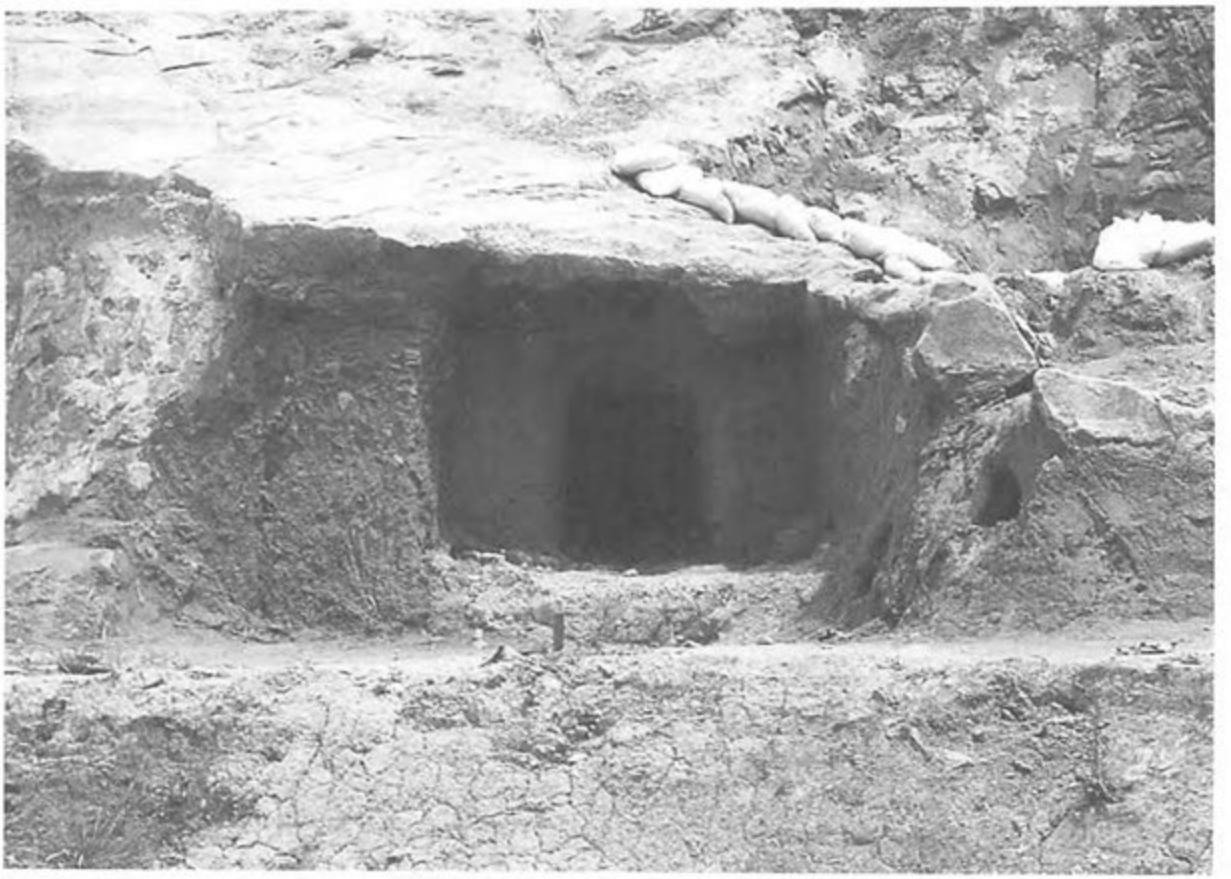
図版 26　第 12 号墓　上：完掘状況（左側は袖墓）
下：完掘状況



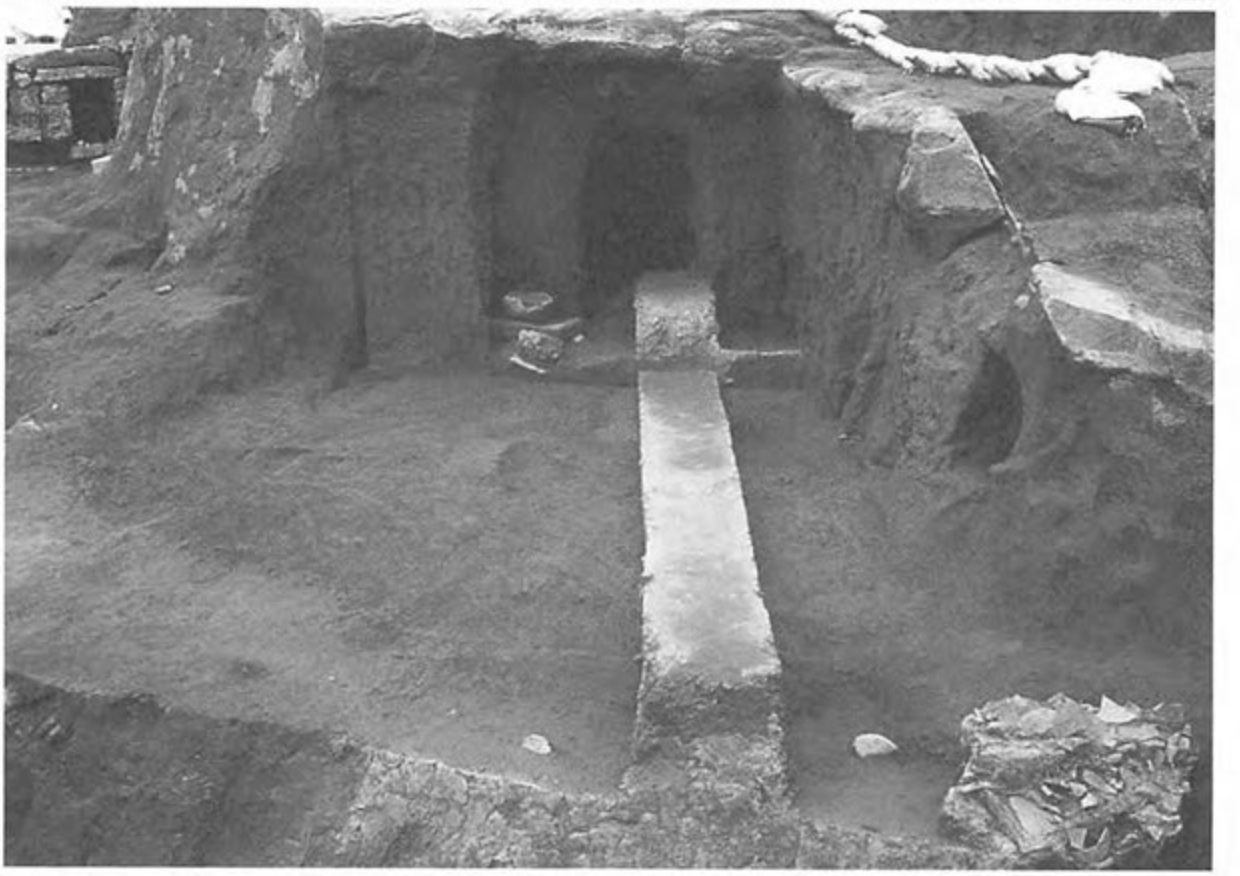


図版 27　第 12 号墓　上：袖墓の完掘状況

下：第 12 号墓と袖墓

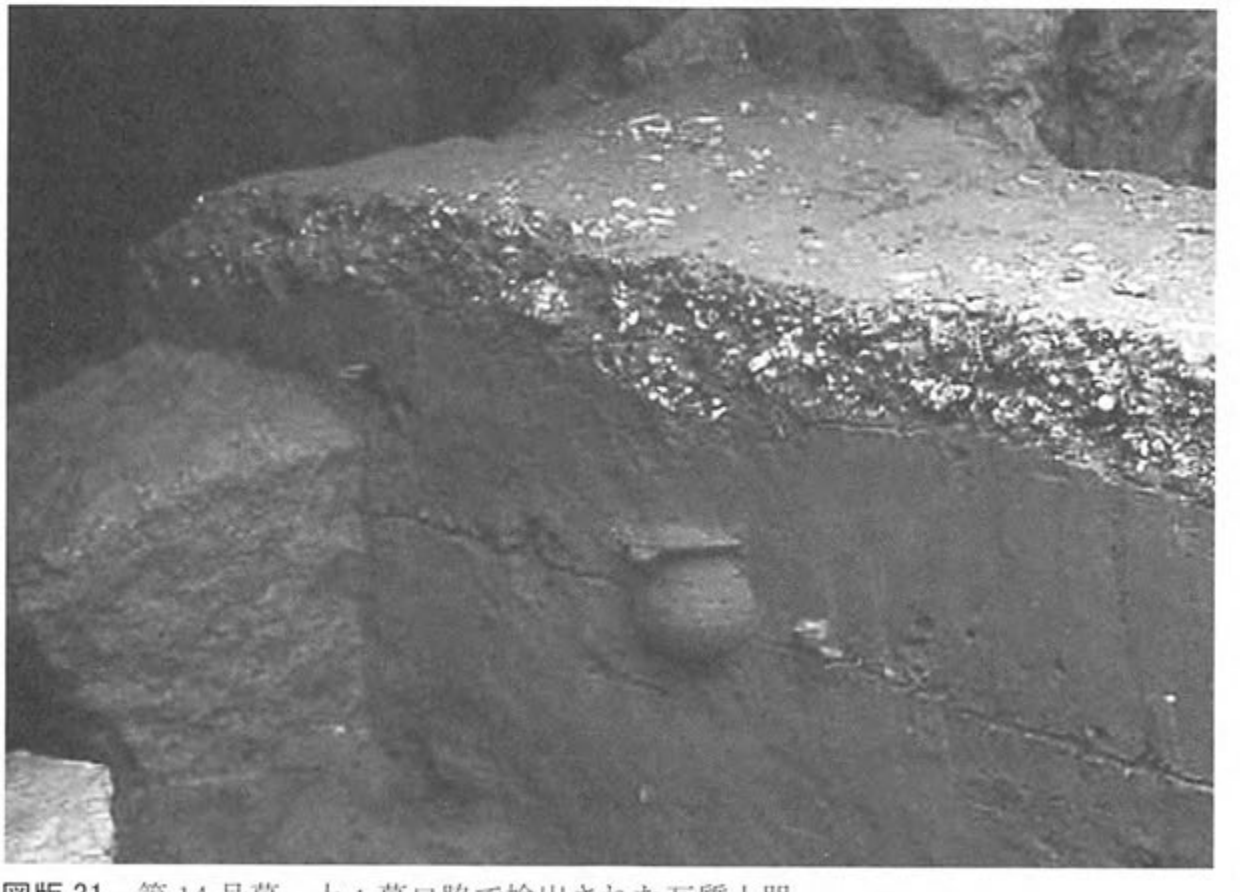


図版 28　第 14 号墓　上：発見時の状況（墓堂全体）
下：発見時の状況（墓口・サンミデー）

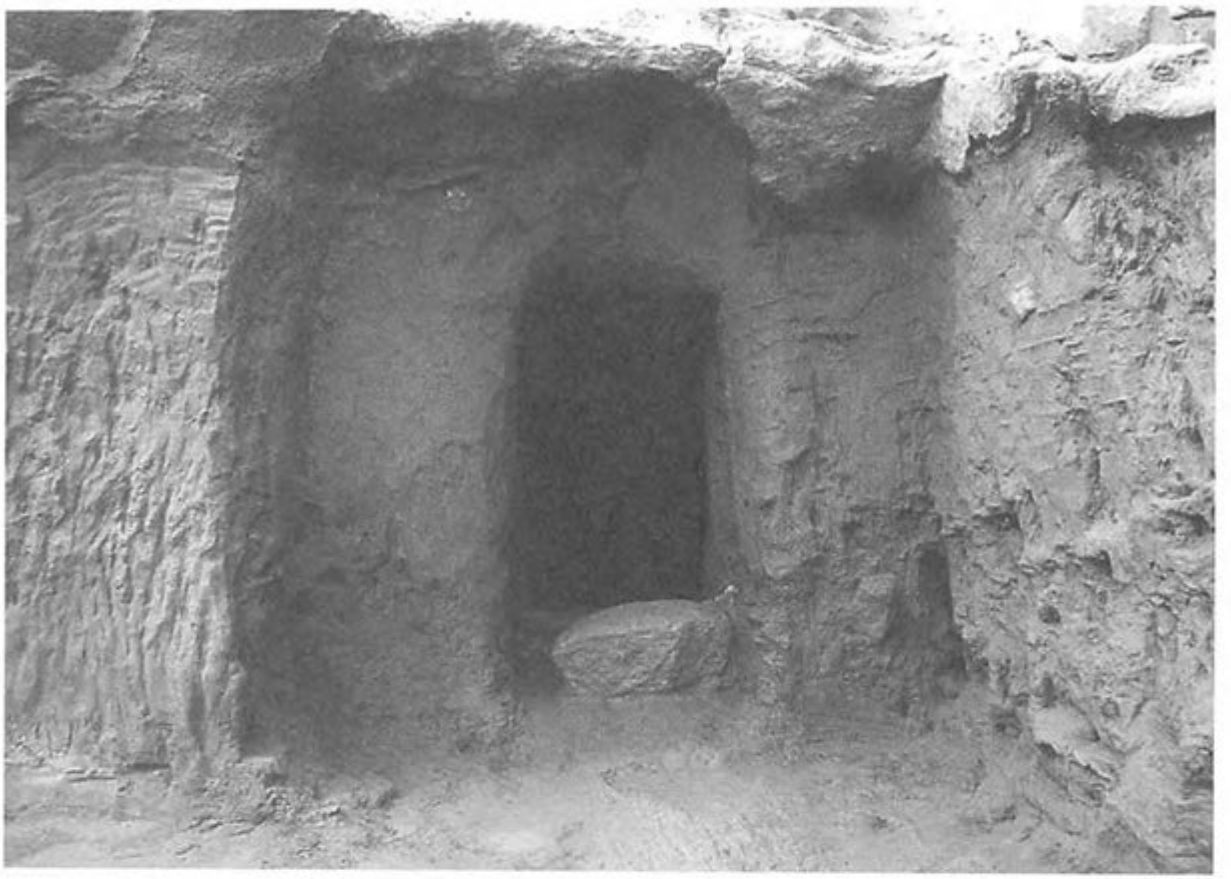


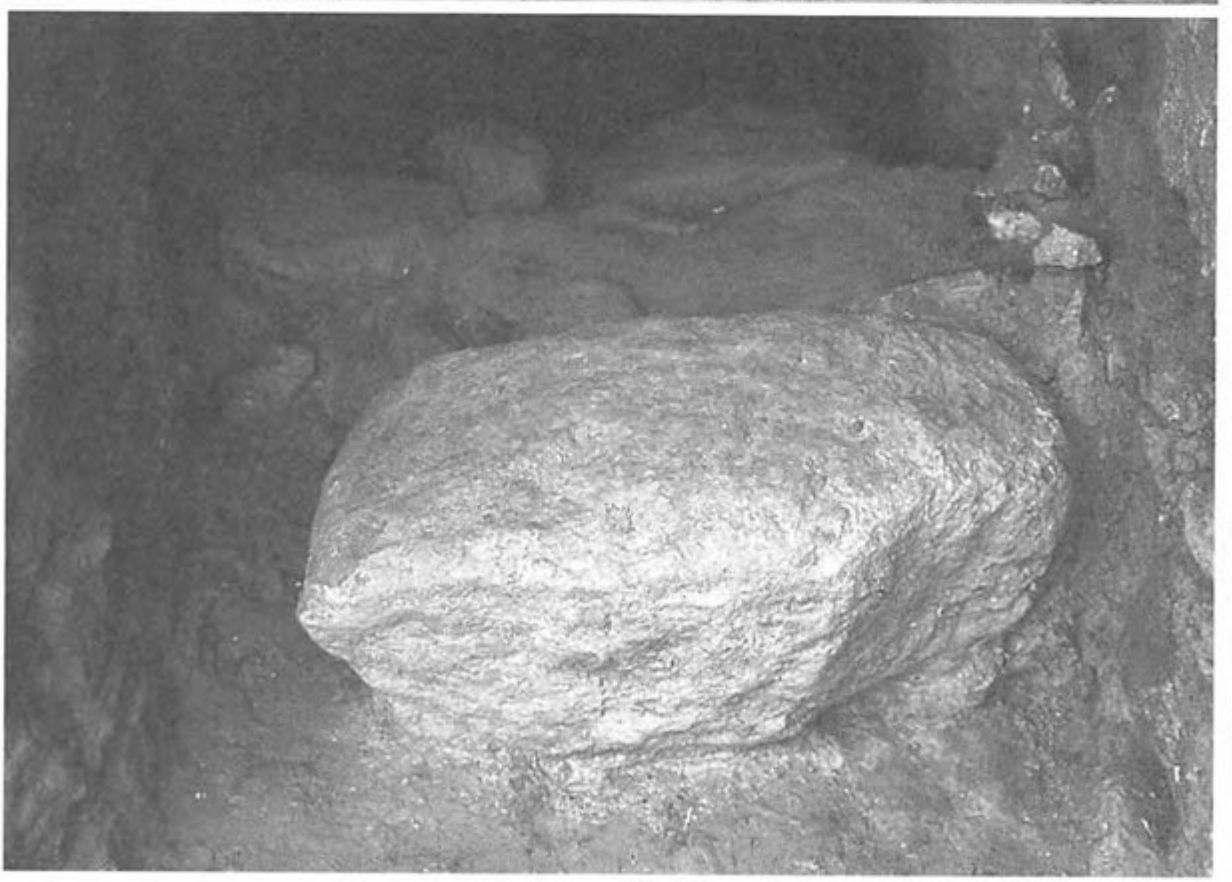
図版 29　第 14 号墓　上：サンミデーの状況（サンゴ礫敷の検出）
下：墓庭の状況

図版 30　第 14 号墓　上：墓庭土層堆積の状況
下：同　　上



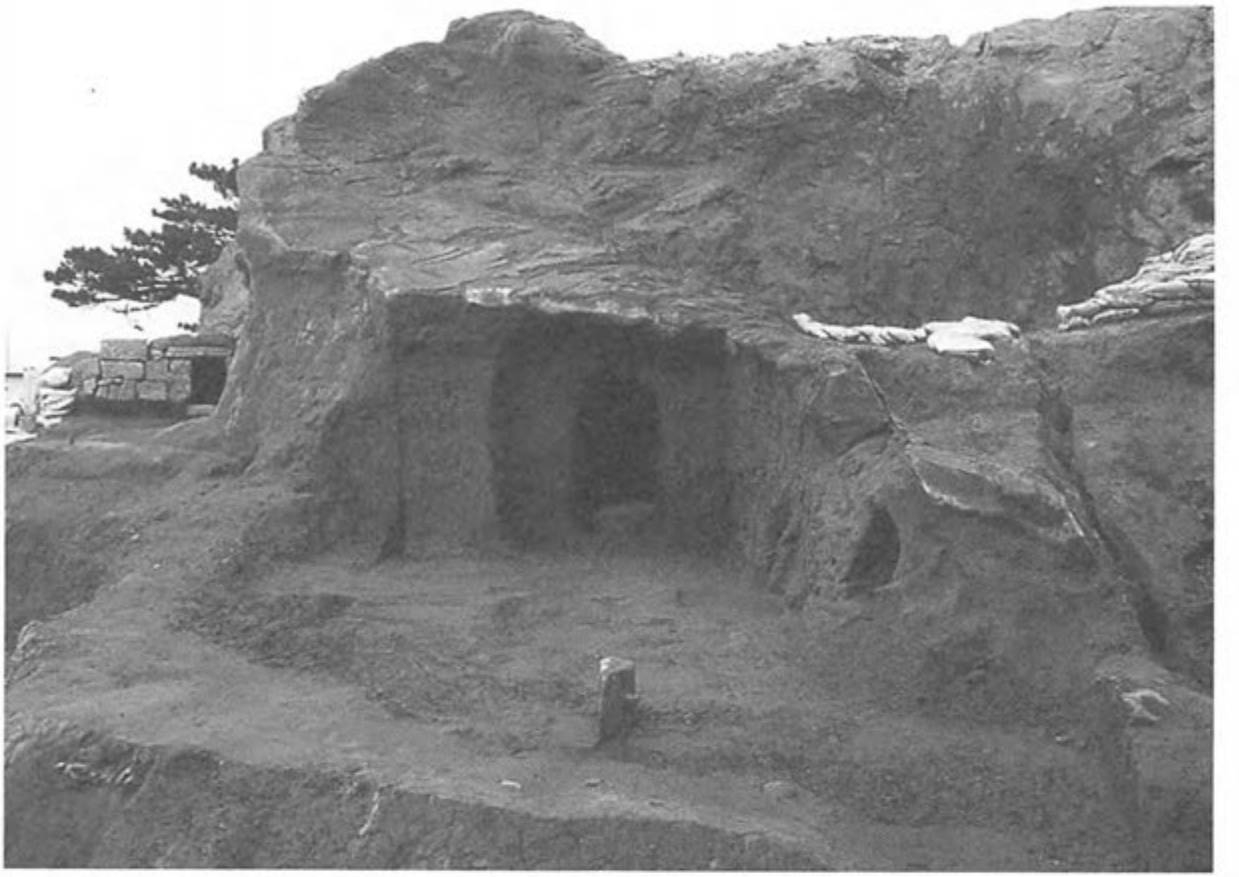
図版 31　第 14 号墓　上：墓口脇で検出された瓦質土器
下：墓口手前で検出された土鍋（サークー）

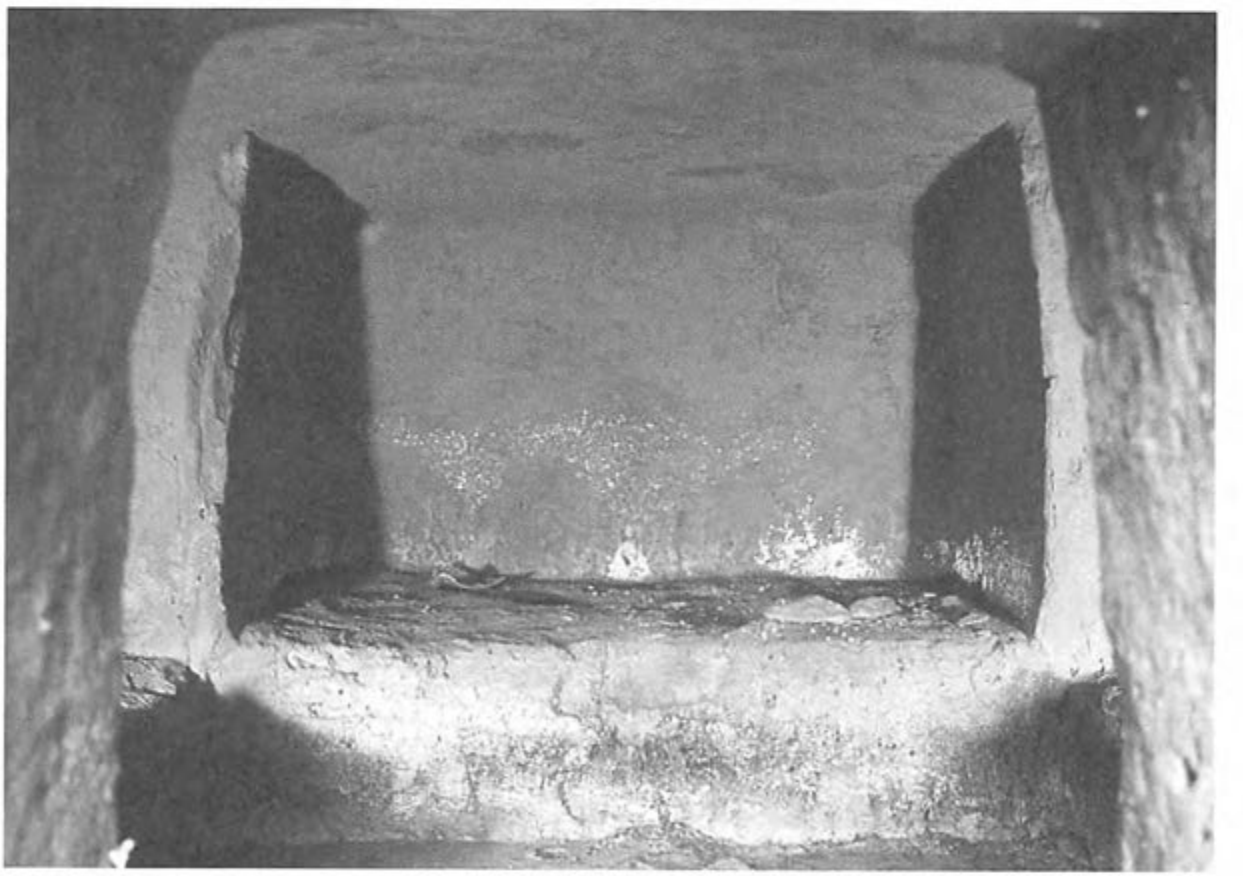




図版 32　第 14 号墓　上：墓口で検出された蓋石
下：同　　上

図版 33　第 14 号墓　上：墓口で検出された蓋石のほぞ穴
下：墓庭脇で検出された小穴（仮墓？）

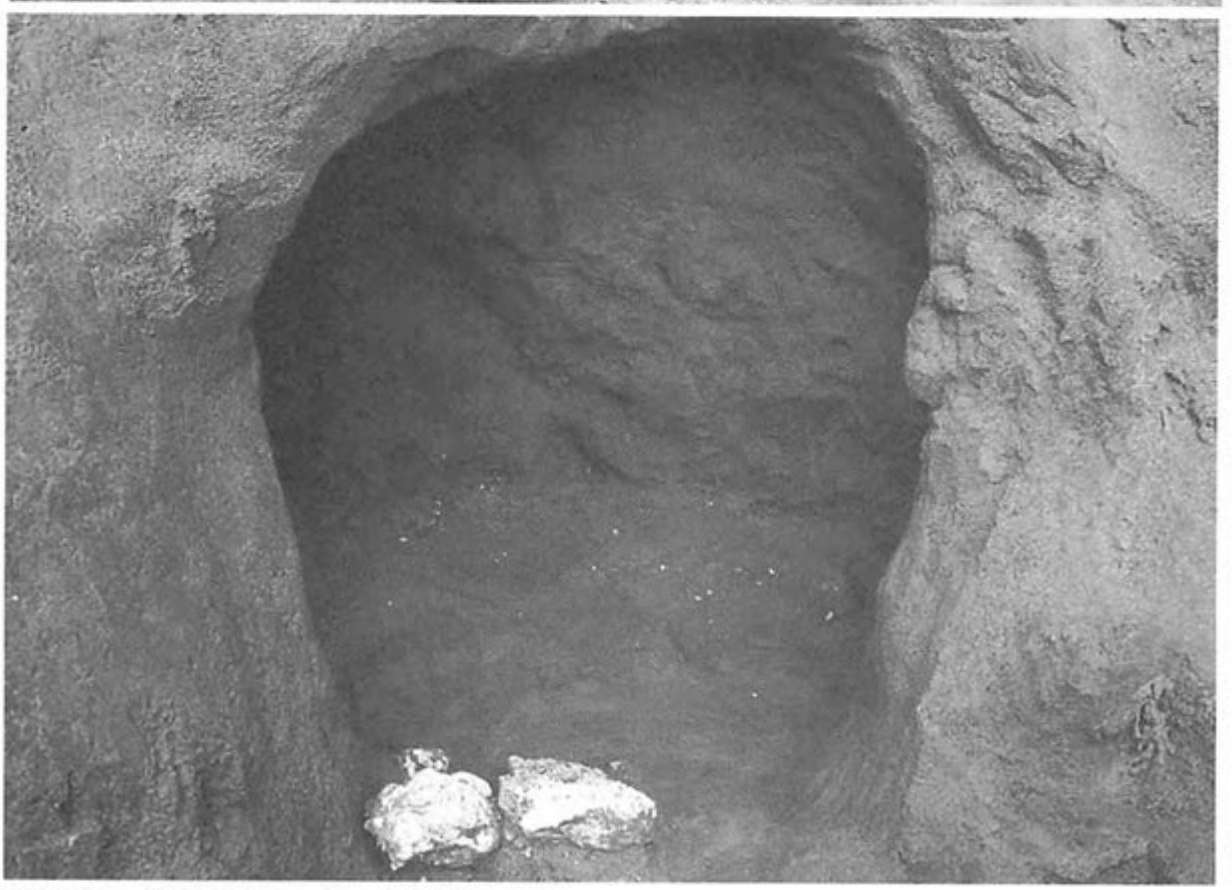




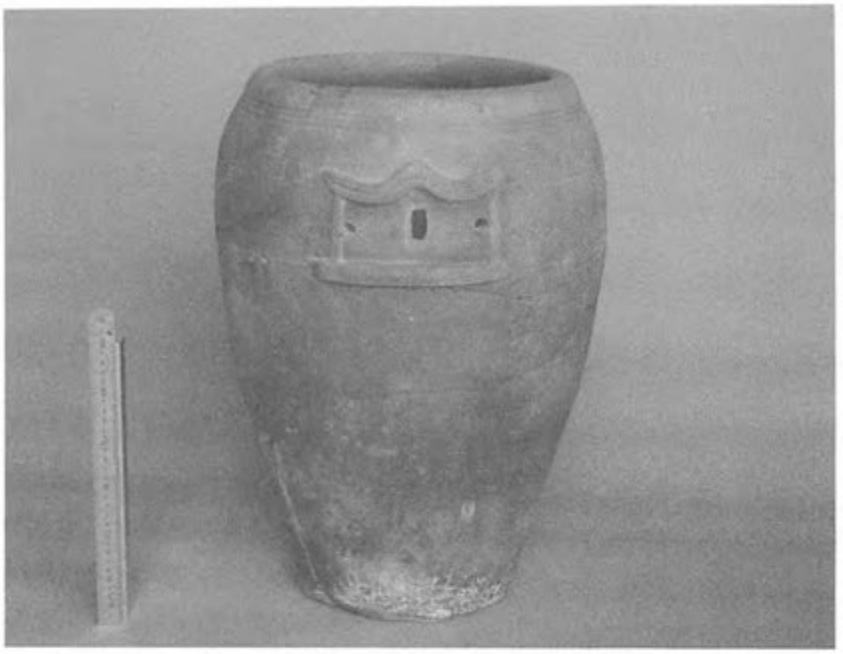
図版 34　第 14 号墓　上：完掘の状況（外観）
下：完掘の状況（墓室）

図版 35　第 15 号墓　上：発見時の状況
下：発掘時の状況

図版 36　第 15 号墓　上：発掘時の状況（蔵骨器の検出）
下：同　上



図版 37　第 15 号墓　上：発掘時の状況
下：完掘の状況



無頸甕形蔵骨器

無頸甕形蔵骨器

無頸甕形蔵骨器

図版38　第1号墓出土蔵骨器

無頸甕形蔵骨器

転用蔵骨器（壷）

転用蔵骨器（壷）

図版39　第1号墓出土蔵骨器

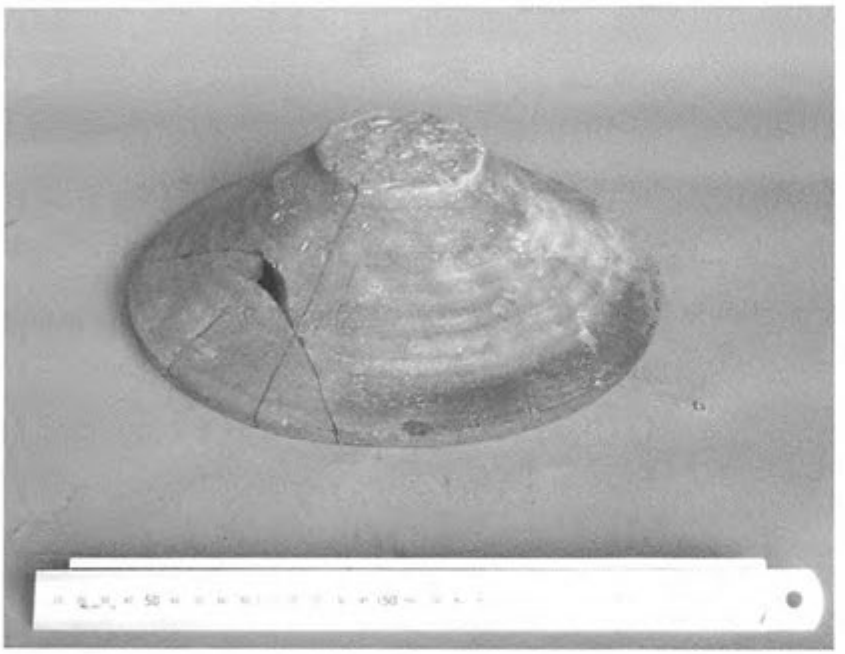
転用蔵骨器（壷）

転用蔵骨器（甕）

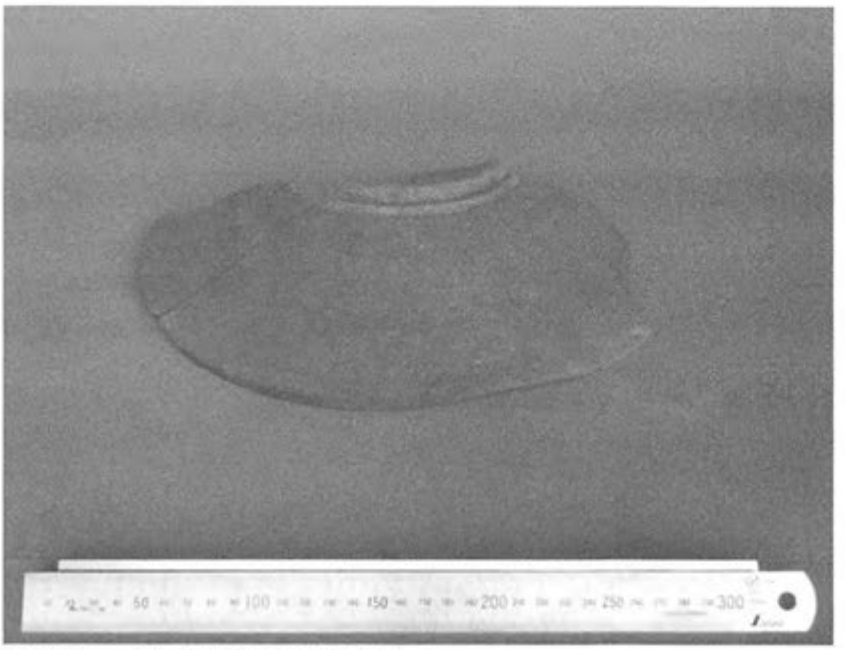
転用蔵骨器（壷）

図版40　第1号墓出土蔵骨器

転用蔵骨器（壷）

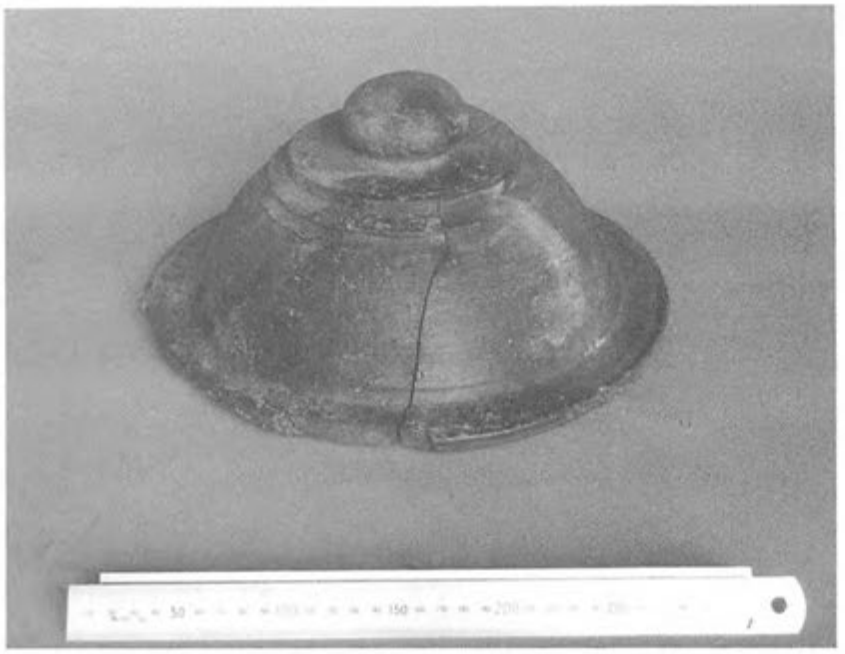


蔵骨器　蓋



蔵骨器　蓋

図版41　第1号墓出土蔵骨器



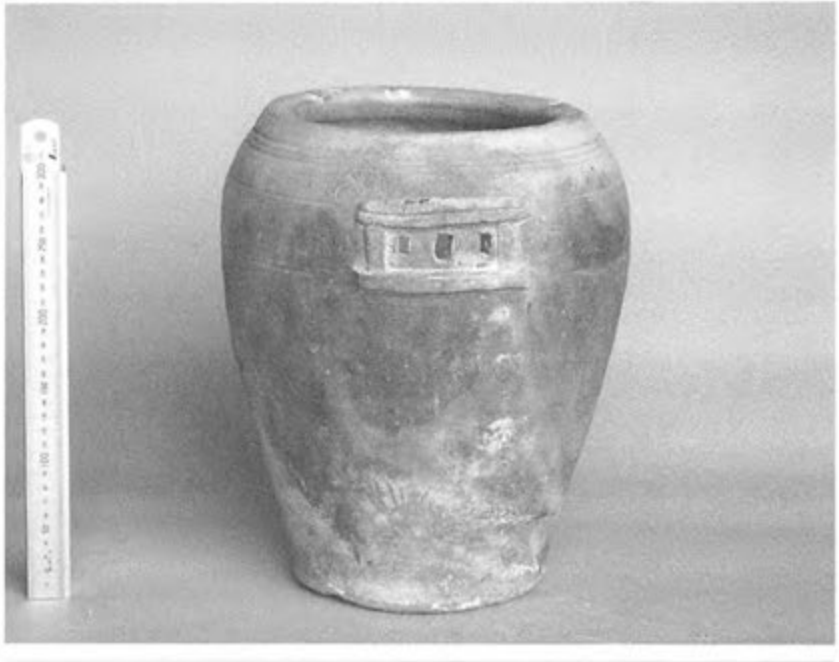
蔵骨器　蓋

無頸甕形蔵骨器

無頸甕形蔵骨器

図版42　第1号墓(上一段目)・第10号墓出土蔵骨器

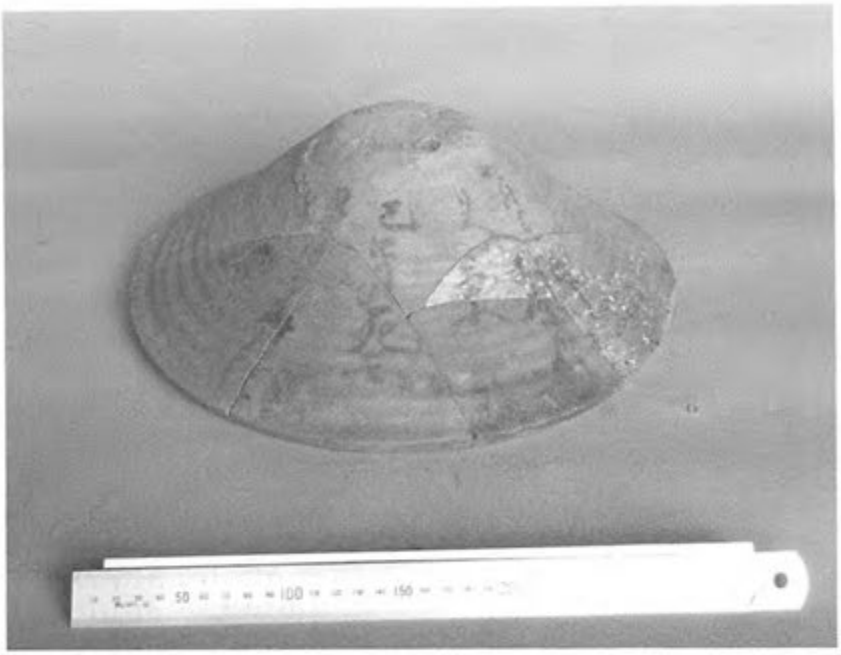
無頸甕形蔵骨器



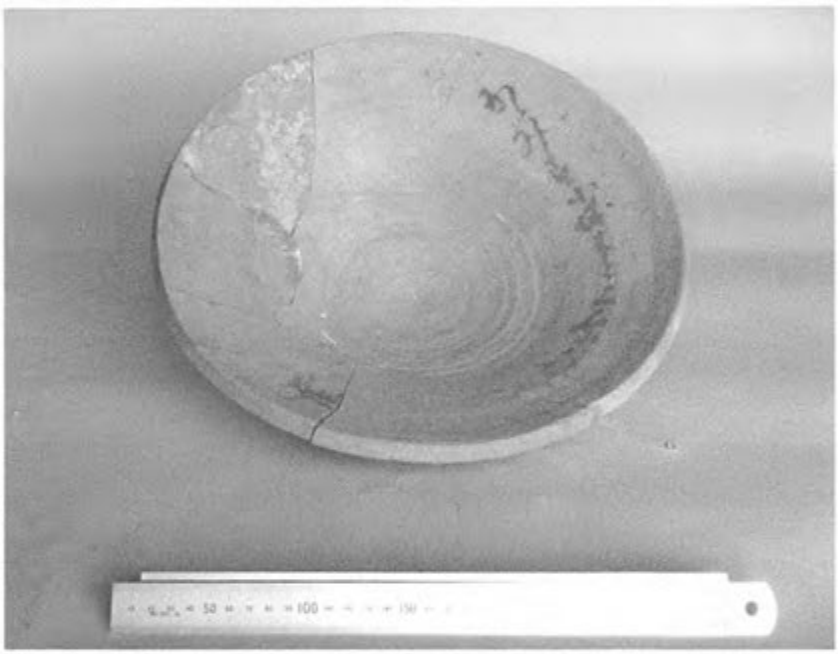
無頸甕形蔵骨器

転用蔵骨器（壷）

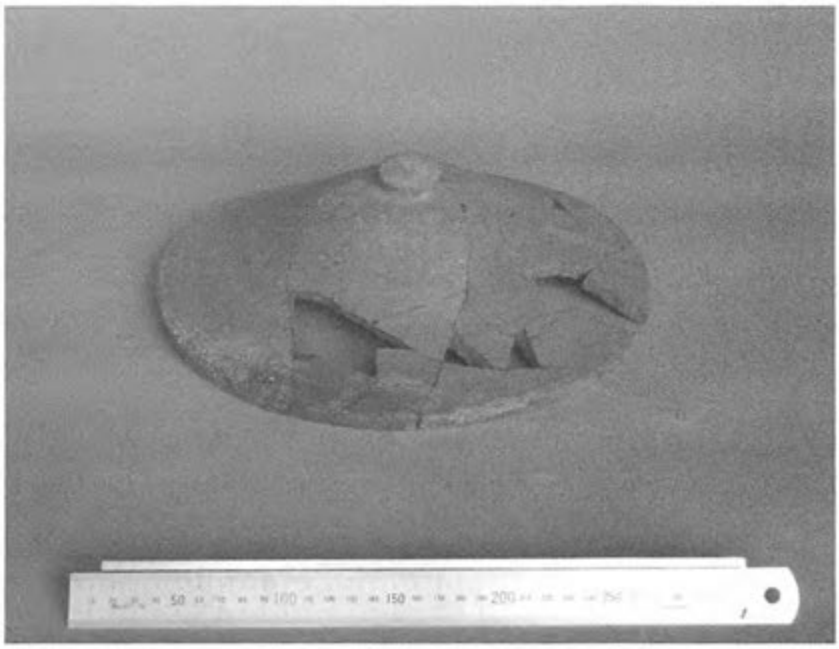
図版43　第10号墓出土蔵骨器



蔵骨器　蓋



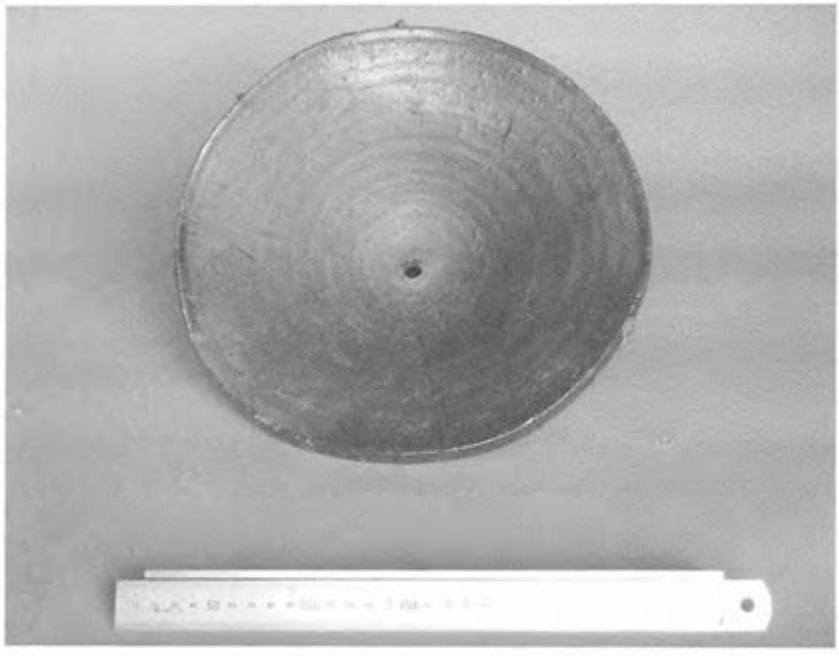
蔵骨器　蓋



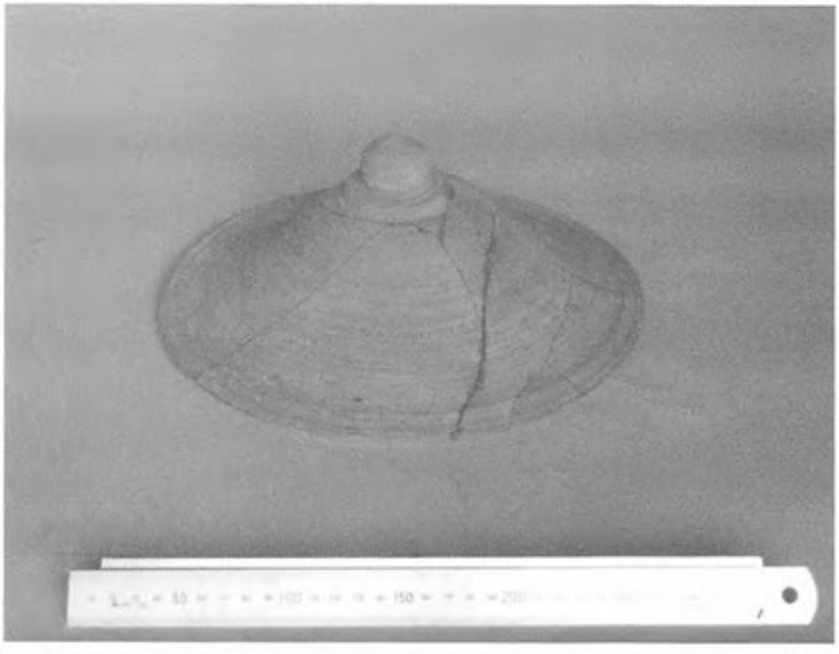
蔵骨器　蓋

図版44　第10号墓出土蔵骨器

蔵骨器　蓋

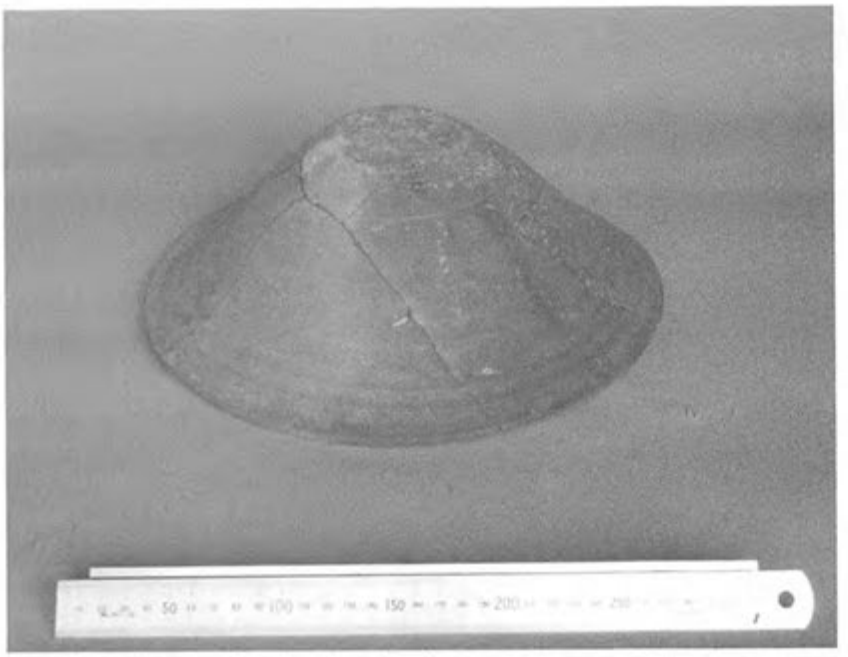


蔵骨器　蓋



蔵骨器　蓋

図版45　第10号墓出土蔵骨器

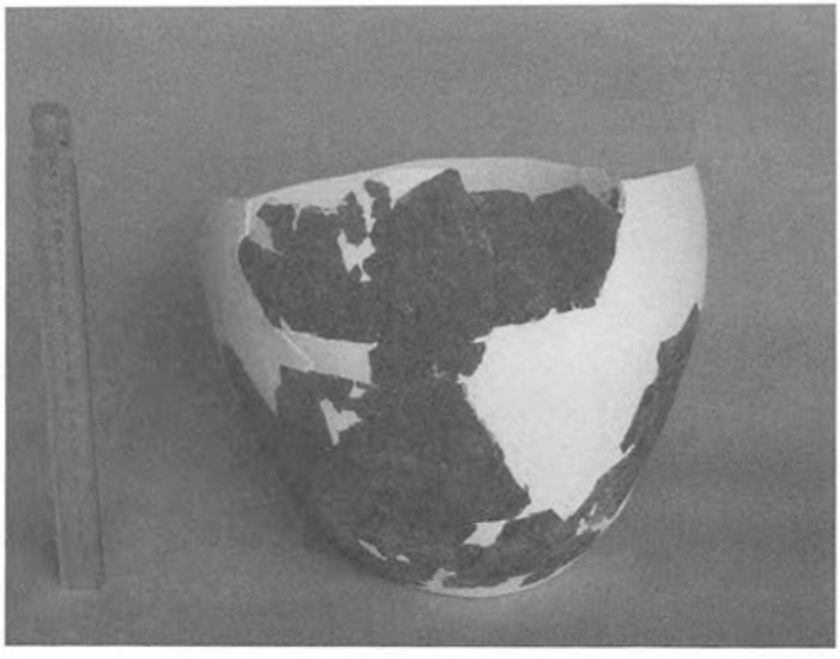


蔵骨器　蓋

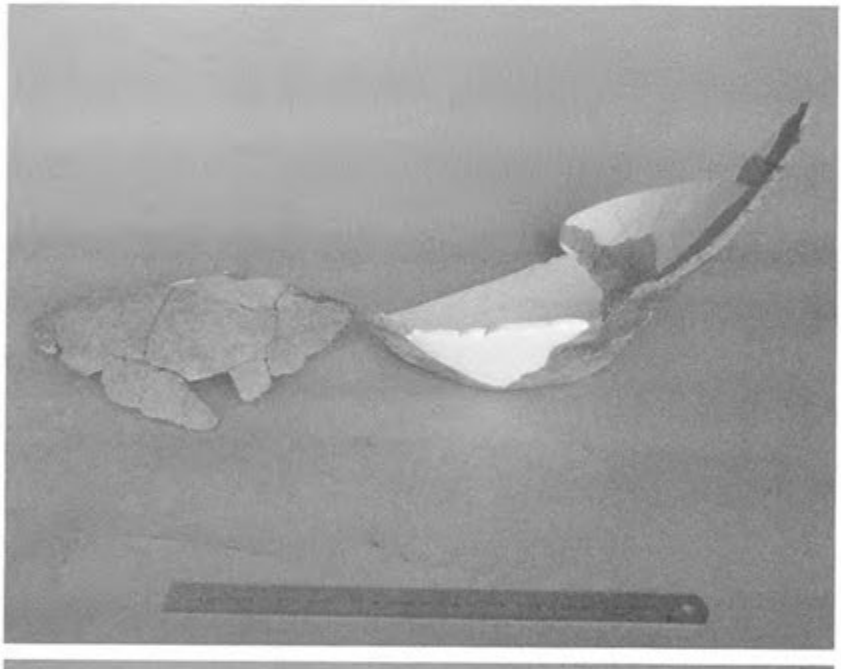
瓦質土器

土器

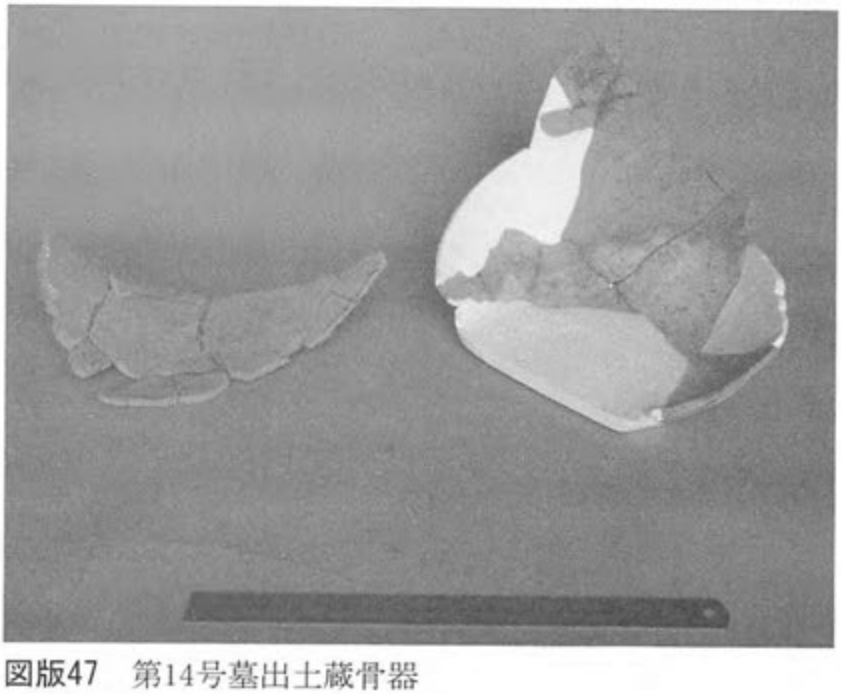
図版46　第14号墓出土蔵骨器



土器



土器

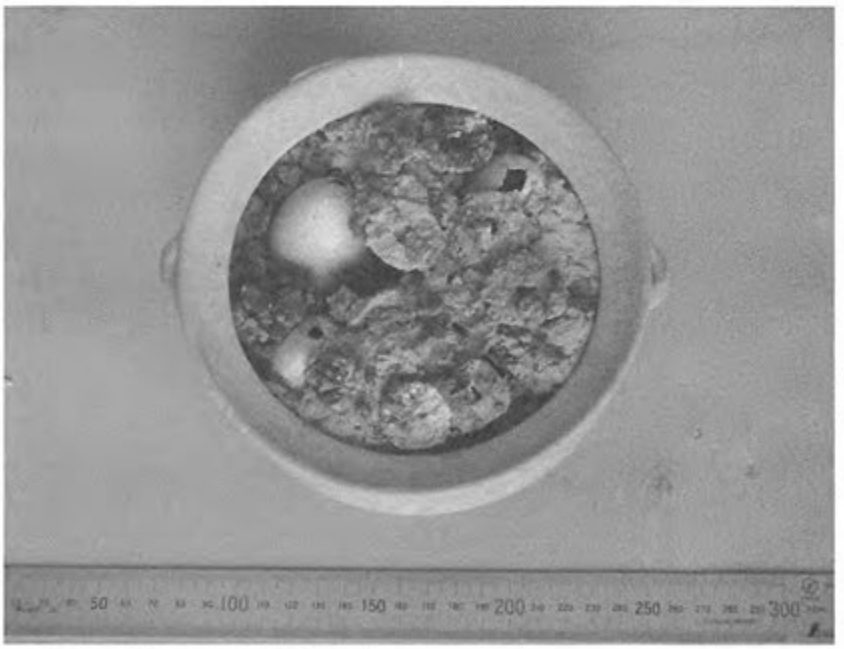


土器

図版47　第14号墓出土蔵骨器

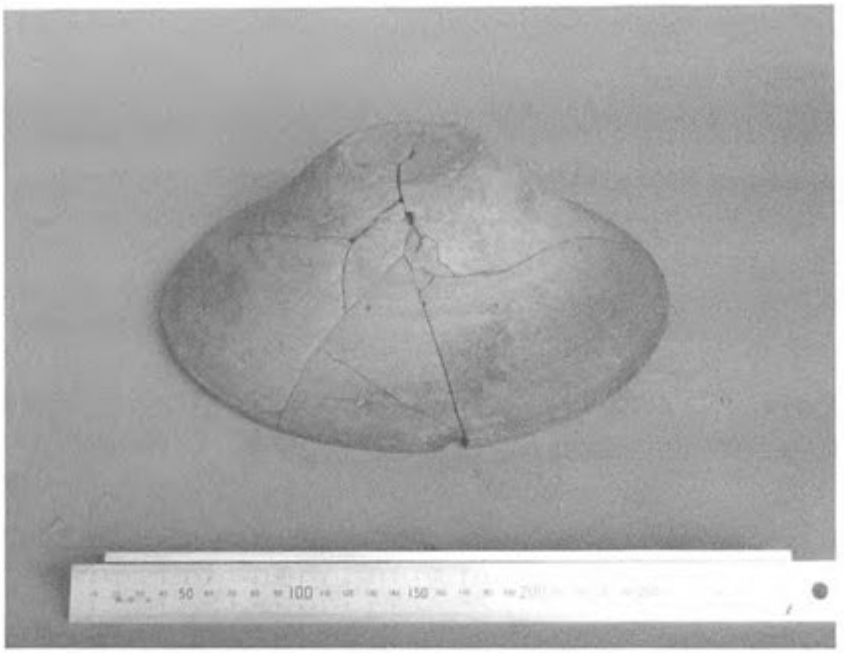
土鍋（サークー）

土鍋（サークー）



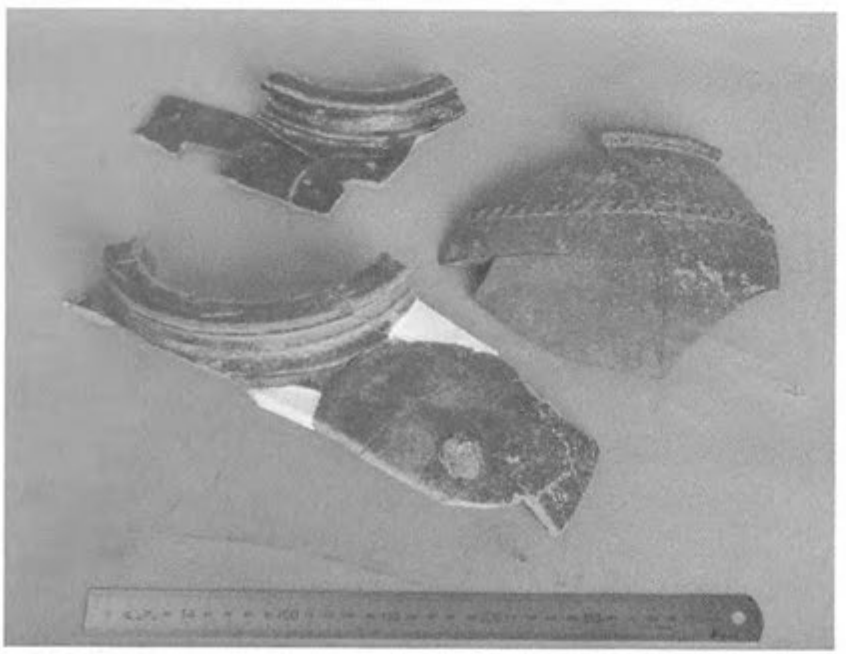
土鍋内の遺物の状況

図版48　第14号墓出土土鍋



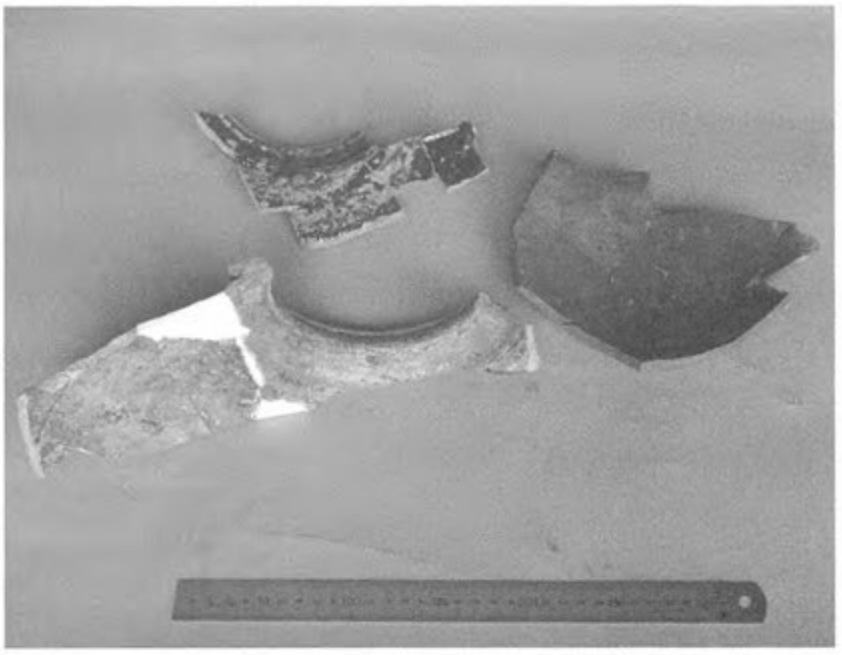
蔵骨器　蓋

蔵骨器　蓋



転用蔵骨器
（褐釉陶器・陶器）

図版49　第14号墓出土蔵骨器



転用蔵骨器
(褐釉陶器・陶器)

有頸甕形蔵骨器

有頸甕形蔵骨器

図版50　第14号墓(上一段目)・第15号墓出土蔵骨器

蔵骨器　蓋

図版51　第15号墓出土蔵骨器

当間古墓群（第Ⅰ地区編）

—航空自衛隊那覇基地庁舎建設工事に伴う緊急発掘調査—

発行　2016（平成 28）年 6 月 2 日
那覇市
〒900-8585　沖縄県那覇市泉崎 1-1-1
編集　那覇市市民文化部文化財課
TEL　098-917-3501
FAX　098-917-3523
印刷　合資会社精印堂印刷
〒902-0072　沖縄県那覇市字真地 399-3
TEL　098-832-1311
FAX　098-832-8380